草際旋看委二錦茵一。
腰間不更抽二白羽一。
老(九)囊已斃衆雛恐。
童穉揶(一〇)揄皆自勇。
忠良效順勢亦然。
一劍猜レ狂敢輕動。
有レ文有レ武方爲レ國。
不二是英雄一伏不レ得。
試徵二張彥一作二將軍一。
幾箇將軍願策勳。

【題義】南陽の小將張彥が硤口鎭の稅人場といふ驛で虎を射たことを詠じた詩である。

【詩意】嘗て天下の太平なのに狎れて猛虎の目を怒らし威を逞しうするものが多かつた。天は善を生し惡を殺す者で、妄に怒を恣にする者ではないが、屢〻人が猛虎の餌食となるのを見ては其儘には して置かない。關東には山路が多く、特に稅人場は行人を艱ましたが、張彥は獨り奮つて虎を退治した。初め虎を見るや之を叱り起たしむること羊を叱るが如く、弦を鳴らし巖阻を越えて行けば、虎は猶ほ林を楯に取つて逆らつた。やがて草の際に敷物にでも坐つてゐるやうに構へてゐるのを見て、たつた一矢で仕止めてしまつた。老虎は已に死して子虎共の恐るるを見て、童兒まで勢を得て之を嘲弄し、皆張彥に倣ひ大事を取つて切り込んだ。あゝ文武兼備の人でこそ始めて國を治むるに足るのである。英雄でなくては此の如く猛虎を退治することは出來ない。試みに張彥を徵して將軍としたならば、多くの將軍が之に從つて勳功を建てようと願ふであらう。

草際旋看る錦茵に委するを、
腰間更に白羽を抽かず。
老囊已に斃れて衆雛恐れ、
童穉揶揄して皆自ら勇む。
忠良效ひ順つて勢亦然す、
一劍狂を猜つて敢て輕しく動かんや。
文あり武あり方に國を爲む、
是れ英雄ならずんば伏し得ず。
試みに張彥を徵して將軍と作さば、
幾箇の將軍か策勳を願はん。

七七〇

なり。衆雛は多くの虎の子。【一〇】揶揄　嘲弄する。晉陽秋に、羅友言首旦出レ門、中途逢二一鬼一、大見二揶揄一とある。

陰雨

潤レ葉濡レ枝浹二四方一。
濃雲來去勢何長。
曠然寰宇清風滿。
救レ旱功高暑氣涼。

陰雨

葉を潤し枝を濡して四方に浹く、
濃雲來去して勢何ぞ長き。
曠然たる寰宇清風滿ち、
旱を救うて功高く暑氣涼し。

【題義】陰雨を詠じた詩である。

【詩意】密雲が去來して葉を潤し枝を濡して四方にひろがり、やがて清風が廣大なる天地の間に吹き滿ちた。かくて大雨一過して旱を救ひ暑氣を掃つた。

喜雨　雨を喜ぶ

西北油然雲勢濃。　西北油然雲勢濃かなり、
須臾霧沛雨飄空。　須臾にして霧沛として雨空に飄る。
頓疎萬物焦枯意。　頓に萬物焦枯の意を疎す、
定看秋郊稼穡豐。　定めて看ん秋郊稼穡の豐なるを。

【題義】雨を喜ぶ詩である。

【詩意】西北の方から濃雲がむらむらと起り、やがて大雨が沛然として降りそそぎ、忽ち萬物の焦枯の意を一掃して生氣を呈せしめた。この分ならば定めて今年の秋は豐作であらう。

【字解】〔一〕油然　雲の起る貌。〔二〕霧沛　雨の降りそそぐ貌。〔三〕稼穡　農作物。

過故洛城　故洛城を過ぐ

故城門前春日斜。　故城門前春日斜なり、
故城門裏無人家。　故城門裏人家無し。
市朝欲認不知處。　市朝認めんと欲するも處を知らず、
漠漠野田飛草花。　漠漠たる野田草花飛ぶ。

【題義】故の洛陽を過ぎて作つた詩である。太平寰宇記に、「故洛城は洛陽縣の東二十里に在り。東西七里、南北九里。內に宮殿臺觀、府藏寺舍、魏晉の代、凡て一萬一千二百二十九門あり。永嘉の亂に劉曜洛陽に入り、元帝江を渡りてより、官署里閭鞠りて茂草となる云云」とある。

【詩意】故洛城の門前には春の日が傾き、門內はヒツソリとして人家もない。昔の市街の跡を認めようとしても何處がそれやらわからず、廣廣とした野田に八千草の花が飛びかはしてゐるばかりだ。

【字解】〔一〕市朝　市中といふ義。市街に家の並ぶこと、恰も朝廷に官吏の列するが如くなる故なりといふ。〔二〕漠漠　廣き貌。陸機の詩に、街巷紛漠漠とある。

誚失婢牓　出唐詩紀事。

失婢の牓を誚る　唐詩紀事に出づ。

宅院小牆卑。坊門帖牓遲。
舊恩慙自薄。前事悔難追。
籠鳥無常主。風花不戀枝。
今宵在何處。惟有月明知。

【字解】〔一〕牓　揭示。たかふだ。〔二〕坊門　市街の門。帖牓は揭示なり。

【題義】脫走した婢を求むる揭示を見て誚つた詩である。

【詩意】家の牆が低かつた爲に飛び越えて逃げたのだらうが、町の揭示も遲かつたから、揭示の出た

頃には已に高飛してしまつたのだらう。それといふのも主人の恩のかけ方が薄かつたからで、それは主人自ら慚づべきである。今更悔いても及ばないことだ。籠の鳥でも主人がきまつてゐるわけではなく、風に散る花は必ずしも舊の枝を戀ふものではない。今宵はどこに居るであらうか。知る者は只天上の明月のみであらう。

江南喜逢蕭九徹因話長安舊遊戲贈五十韻　出才調集

江南にて蕭九徹に逢ふを喜び、因つて長安の舊遊を話り、戲れに五十韻を贈る　才調集に出づ。

憶昔嬉遊伴。多陪歡宴場。
憶ふ昔嬉遊の伴、多く陪す歡宴の場。
寓居同永樂。幽會共平康。
寓居永樂を同じうし、幽會平康を共にす。
師子尋前曲。聲兒出內坊。
師子前曲を尋ね、聲兒內坊を出づ。
花深態奴宅。竹錯得憐堂。
花は深し態奴の宅、竹は錯る得憐の堂。
庭晚開紅藥。門閑蔭綠楊。
庭晚れて紅藥開き、門閑にして綠楊蔭ふ。
經過悉同巷。居處盡連牆。
經過悉く同巷、居處盡く連牆。
時世高梳髻。風流澹作妝。
時世高く髻を梳り、風流澹く妝を作す。
戴花紅石竹。帔暈紫檳榔。
花を戴く紅石竹、暈を帔す紫檳榔。
鬢動懸蟬翼。釵垂小鳳行。
鬢動いて蟬翼を懸け、釵垂れて小鳳行く。
拂胸輕粉絮。煖手小香囊。
胸を拂つて粉絮輕く、手を煖めて香囊小なり。
選勝移銀燭。邀歡舉玉觴。
勝を選んで銀燭を移し、歡を邀へて玉觴を擧ぐ。
爐烟凝麝氣。酒色注鵝黃。
爐烟麝氣を凝らし、酒色鵝黃を注ぐ。
急管停還奏。繁絃慢更張。
急管停まりて還た奏し、繁絃慢にして更に張る。
雪飛廻舞袖。塵起繞歌梁。
雪飛んで舞袖を廻らし、塵起りて歌梁を繞る。
舊曲翻調笑。新聲打義揚。
舊曲調笑を翻し、新聲義を打つて揚る。
多情推阿軟。巧語許秋孃。
多情阿軟を推し、巧語秋孃を許す。
風暖春將暮。星廻夜未央。
風暖かにして春將に暮れんとし、星廻りて夜未だ央ならず。
宴餘添粉黛。坐久換衣裳。
宴餘粉黛を添へ、坐すること久しうして衣裳を換ふ。
結伴歸深院。分頭入洞房。
伴を結んで深院に歸り、頭を分ちて洞房に入る。
綵帷開翡翠。羅薦鴛鴦。
綵帷翡翠を開き、羅薦鴛鴦を拂ふ。
留宿爭牽袖。貪眠各占牀。
留宿して爭つて袖を牽き、眠を貪つて各〻牀を占む。

綠窗籠二水影一紅壁背二燈光一。
索レ鏡收二花鈿一邀レ人解二袷襠一。
暗嬌妝罷笑。私語口脂香。
怕レ曉聽レ鐘坐。羞レ明映レ縵藏。
眉殘蛾翠淺。鬟解綠雲長。』
聚散知無レ定。憂歡事不レ常。
離筵開二夕宴一。別騎促二晨裝一。
去住青門外。留連滻水傍。
車行遙寄レ語。馬駐共相望。
雲雨分何處。山川共異レ方。
野行初寂莫。店宿乍怳惶。
別後嫌二宵永一。愁來厭二歲芳一。
幾看花結レ子。頻見露爲レ霜。
歲月何超忽。音容坐渺茫。

綠窗水影を籠め、紅壁燈光に背く。
鏡を索めて花鈿を收め、人を邀へて袷襠を解く。
暗嬌妝罷笑ひ、私語口脂香し。
曉を怕れて鐘を聽いて坐し、明を羞ぢて縵に映じて藏る。
眉殘りて蛾翠淺く、鬟解けて綠雲長し。』
聚散知んぬ定なきを、憂歡事常ならず。
離筵夕宴を開き、別騎晨裝を促す。
去住青門の外、留連滻水の傍。
車行きて遙に語を寄せ、馬駐りて共に相望む。
雲雨何處にか分るる、山川共に方を異にす。
野を行けば初めて寂莫、店に宿すれば乍ち怳惶。
別後宵の永きを嫌ひ、愁來りて歲芳を厭ふ。
幾たびか看る花の子を結ぶを、頻に見る露の霜と爲るを。
歲月何ぞ超忽、音容坐ながら渺茫。

往還書斷絕。來去夢遊揚。』
自レ我辭二秦地一。逢二君客一レ楚鄉一。
常嗟異二岐路一。忽喜共二舟航一。
話レ舊堪レ垂レ淚。思レ鄉數斷腸。
愁雲接二巫峽一。淚竹近二瀟湘一。
月落江湖闊。天高節候涼。
浦深烟渺渺。沙冷月蒼蒼。
紅葉江楓老。青蕪驛路荒。
野風吹二蟋蟀一。湖水浸二菰蔣一。
帝路何由見。心期不レ可レ忘。
舊遊千里外。往事十年強。
春晝提レ壺飲。秋林摘レ橘嘗。
強歌還自感。縱飲不レ成レ狂。
永夜長相憶。逢レ君各共傷。

往還書斷絶し、來去夢遊揚す。』
我秦地を辭してより、君が楚鄉に客たるに逢ふ。
常に嗟く岐路を異にするを、忽ち喜ぶ舟航を共にするを。
舊を話りて淚を垂るるに堪へ、鄉を思ひて數〻腸斷す。
愁雲巫峽に接す、淚竹瀟湘に近し。
月落ちて江湖闊く、天高くして節候涼し。
浦深くして烟渺渺、沙冷かにして月蒼蒼。
紅葉江楓老い、青蕪驛路荒る。
野風蟋蟀を吹き、湖水菰蔣を浸す。
帝路何に由つてか見ん、心期忘るべからず。
舊遊千里の外、往事十年強。
春晝壺を提げて飲み、秋林橘を摘んで嘗む。
強歌して還た自ら感じ、縱飲狂を成さず。
永夜長く相憶ひ、君に逢うて各〻共に傷む。

殷勤萬里意。幷寫贈蕭郎。（四二）（四三）

【字解】【一】永樂　長安の坊の名。【二】平康　開元遺事に、長安有平康坊、妓女所居之地、毎年新進士游謁其中、時人謂爲風流藪澤とある。【三】師子　獅子なり。舊唐書音樂志に、太平樂後周武帝時造、亦曰五方師子舞、綴毛爲師子、人居其中、像其俛仰馴狎之容、二人持繩秉拂、爲習弄之狀とある。【四】聲兒　歌聲なり。內坊は坊市なり。【五】態奴　妓の名であらう。【六】得憐　妓の名であらう。【七】紅藥　紅の芍藥の花。【八】時世　時世粧。當代流行の粧。【九】帔暈　帔は肩先にまとふこと。暈はぼかし染の衣。紫檳榔は染色の名。【一〇】勝　勝侶。良伴。【一一】歡　女、男を稱して歡といふ。古樂府に多く之を用ふ。【一二】麝氣　麝香のにほひ。【一三】鵝黃　鵝兒色黃なり。故に黃色の嬌美なる者を通稱して鵝黃といふ。【一四】調笑　戲謔なり。【一五】阿軟　長安の妓の名。【一六】秋孃　妓の名。【一七】洞房　奥深い室。【一八】翡翠　鳥の名。其羽美麗なり。雄を翡といひ、雌を翠といふ。【一九】羅薦　薄絹の臥席。【二〇】花鈿　婦人の首飾。前額に貼りつけるもの。唐の小說に、韋固の妻が眉間の傷を掩ふ爲に花鈿を貼つたとある。【二一】袷襠　阮籍の大人先生論に、行不敢離縫際、動不敢出褌襠とあれば、寢る時の服であらう。【二二】縵　幔に通ず、幕なり。【二三】蛾翠　黛のあと。【二四】綠雲　ふさふさとした黑髮。【二五】離筵　離別の宴席。【二六】青門　長安門の東南門なり。漢の邵平の瓜を種ゑし處。【二七】滻水　長安の附近の川の名。【二八】悒惶　煩惱の貌。【二九】超忽　過ぎ去るの速かなること。【三〇】渺茫　遙遠の貌。【三一】遊揚　史記季布傳に、曹丘揖季布曰、僕遊揚足下之名于天下、顧不重耶とある。【三二】秦地　長安は古の秦の地なり。因つて長安をいふ。【三三】楚鄉　江南は古の楚の地なり。【三四】巫峽　三峽の一。湖北省巴東縣の西に在り。【三五】淚竹　相傳ふ、舜の蒼梧に崩ずるや、二妃追ひ至り哭すること極めて哀し。淚竹を染め、斑斑として淚痕の如しと。瀟湘は川の名。湖南省に在り。【三六】青蕪　青青とした野原。【三七】蟋蟀　こほろぎ。蟲の名。【三八】菰蔣　蘆の類の草。【三九】帝路　帝都への道。【四〇】心期　深交ある友。【四一】十年强　十年餘。【四二】殷勤　ねんごろなる貌。【四三】蕭郎　蕭徹を指していふ。

【題義】江南で蕭徹（九は輩行であらう）に逢つたことを喜び、長安に居た頃の舊遊を語りあひ、戲れに贈つた五十韻百句の長詩である。

【詩意】憶へば昔は君と僕とは遊仲間で、屢〻歡宴の席にも出入し、共に永樂坊に寓居して平康坊の色町に會して歌曲の樂を盡し、芍藥の花の咲き誇り、青柳の絲の垂れてゐる歌妓の堂にもしけこんだものであつた。歌妓は當世風の高髷に結ひ、垢拔けのした薄化粧を施し、紅の石竹の花を髮に插し、紫の暈の肩衣をまとひ、蟬の羽のやうな鬢に小鳳の釵を垂れ、銀燭の下に愛人を邀へて杯を擧げる。香爐には麝香の氣を漂はせ、杯には山吹色の酒を注ぎ、舞へや歌への亂痴氣騷ぎをなし、酒興が白けかかれば、更に粉黛を凝らし衣裳を著換へ、手に手を執つて奥まつた座敷に入り、鴛鴦の契も睦しく、窗外には池水の影がうつり、壁に背いた燈の紅なる處、鏡を取つて首飾を除き、寄り傍うて袷襠を解き、嬌を含んで笑ひ、私語する口脂の香も高く、曉の鐘を怕れて坐し、夜の明けるのを羞ぢて幔幕の陰に隱れると、黛の跡が纔に殘り、寢亂髮が雲の如く長い。（以上第一段、長安の舊遊を敍す。）離合聚散定なく、憂歡常ならぬは此世の習であるから、夕に離別の宴を開き、晨に旅裝を促して、君は長安を去り僕は後に留ることになつて、青門の外で手を分ち、滻水の傍に留連し、相別るるに忍びないで遙に語を寄せたり、馬を駐めて相望んだりした。かくて雲雨と同じく分散し、幾山川を隔てることになつた。君も別れて後は旅寐の夢圓ならず、獨寐の夜の永きをかこち、花を見ても愁を催し、春を送り秋を迎へたであらう。月日の流は早いもので、一たび別れては音容復た接すべからず、書面の往來も斷え、ただ夢中に相遇ふのみであつた。（以上第二段、別後星霜の屢〻易

りしことを叙す。）僕も其後長安を去つたが、今久し振りで江南で君に逢ひ、舟航を共にするのは、實に意外の喜である。共に昔遊を語り故郷を思うて涙を流せば、巫峽の方まで續いてゐる愁雲や湘竹の淚痕の斑なるを見るにつけても一入感を深うし、江邊に月が傾いて秋風が身にしみ、江楓の色褪せ驛路の荒れてゐるのを眺めては、都の空のみ慕はしく、舊友を思うて忘れられない。春は壺を提げて飲み、秋は橘を摘んで食ひ、強ひて歌など歌つて見るが、どうしても狂熱が湧かない。ただ君と感傷を同じうするのみである。因つて萬里の故郷を思ふ殷勤の情を賦して、君に呈する次第である。（以上第二段、今を撫し昔を思ひ、滿目凄涼。）

贈二薛濤一　出二張爲主客圖一。

薛濤に贈る　張爲主客の圖に出づ。

蛾眉山勢接二雲霓一。　蛾眉山勢雲霓に接す、
欲レ逐二劉郎一北路迷。　劉郎を逐はんと欲して北路に迷ふ。
若レ似二剡中容易到一。　剡中容易に到るが若似きも、
春風猶隔二武陵溪一。　春風猶ほ隔つ武陵溪。

【題義】薛濤（名妓の名。もと長安の良家の女で父の蜀に宦するに隨ひ、蜀中に流落し遂に妓籍に入る）に贈つた詩である。

【詩意】蛾眉（暗に薛濤に喩ふ）の巓が高く雲に接し、劉郎の後を慕うて北路に迷うてゐる。劉郎の居る剡中に往くのは何でもないやうであるが、春風が猶ほ武陵溪を隔ててゐるから仲仲容易には往けまい。

【字解】〔一〕蛾眉　蜀の山の名。一に峨眉とも書く。兩山相對して蛾眉の如くなる故蛾眉ともいふ。〔二〕劉郎　劉禹錫であらう。〔三〕剡中　剡溪の中。浙江省剡縣の南に在り。〔四〕武陵溪　湖南省に在る溪の名。

酬二令狐留守尚書見贈十韻一　以下出二錢氏絳雲樓藏本一。

令狐留守尚書の贈られしに酬ゆ十韻　以下錢氏絳雲樓藏本に出づ。

長慶清風在二夔龍一、　長慶清風在り、夔龍變理の餘。
太和膏雨降、周邵保釐初。　太和膏雨降り、周邵保釐の初。
嵩少當二官署一、伊瀍入二禁渠一。　嵩少官署に當り、伊瀍禁渠に入る。
曉關開二玉兎一、夕鑰納二銀魚一。　曉關玉兎を開き、夕鑰銀魚を納る。
舊眷憐二移疾一、新吟念二索居一。　舊眷移疾を憐み、新吟索居を念ふ。
離聲雙白鷴、行色一籃輿。　離聲雙白鷴、行色一籃輿。
罷免無二餘俸一、休閒有二敝廬一。　罷免せられて餘俸無く、休閒して敝廬有り。

慵於嵇叔夜。渴似馬相如。　嵇叔夜よりも慵く、馬相如よりも渴す。
酒每蒙酤我。　酒は每に我に酤るを蒙り、
詩嘗許起予。　詩は嘗て予を起すを許す。
洛中歸計定。一半爲尙書。　洛中歸計定まる、一半尙書の爲なり。

【字解】【一】長慶　穆宗の年號。【二】夔龍　舜の二臣の名。夔は和なり理は治なり。書經に玆惟三公、論道經邦、燮理陰陽とある。【三】太和　文宗の年號。膏雨は慈雨といふが如し。【四】周邵　周の宰相たりし周公旦、召公奭。保釐は治むること。【五】嵩少　嵩山。洛陽の附近に在り。【六】伊瀍　二川の名。洛陽に在り。禁渠は禁裏の堀。【七】玉兎　月をいふ。【八】夕鑰　鑰は門を鎖す具。芝田錄に、門鑰必以魚、取其不瞑目守夜之義とあり。銀魚は鑰を指して言ふならん。魚袋と見ても可ならんか。【九】舊眷　舊友なり。移疾は移轉し或は病に罹ること。【一〇】索居　人と離れて淋しく暮すこと。【一一】嵇叔夜　魏の嵇康、字は叔夜、竹林七賢の一人。【一二】馬相如　漢の司馬相如。常に消渴の疾あり。消渴は糖尿病なりといふ。【一三】起予　論語に、子夏問曰、巧笑倩兮、美目盼兮、素以爲絢兮、何謂也、子曰、繪事後素、曰禮後乎、子曰、起予者商也、始可與言詩已矣とある。【一四】洛中　洛陽。

【題義】令狐楚から詩を贈られたのに酬いた十韻二十句の詩である。令狐楚は太和三年に檢校兵部尙書、東都留守になつた。

【詩意】古の夔龍や周召にも比すべき君が、天子を輔けて世を治めたから、長慶から太和にかけて清風が吹き膏雨が降つて世は太平を頌してゐる。今君は東都留守として洛陽に居り、嵩山が丁度君の役所の正面に聳え、伊瀍の二川が禁中の御堀に流れ注ぎ、曉には門を開いて玉兎を仰ぎ、夕には魚の形の錠前をかけて宮門を閉ぢなどして、舊友の或は移り或は疾むを憐み、僕の索居を念うて新作を寄せられた。さて僕は白鸝の鳴いて別るる聲を聞き、網代駕籠に乘つて去る君を送つてから、官を免ぜられて餘俸もなく、ただ洛陽に閒居すべき敝廬があるのみで、嵇康よりも慵者で、司馬相如よりも病身ではあるが、君からは屢〻酒の饗應に預り、詩の方でも屢〻君から稱贊された。されば自分も洛陽に歸臥しようと計畫を定めたが、それといふのも半は洛陽には君が居る爲である。

聽蘆管

蘆管を聽く

幽咽新蘆管。淒涼古竹枝。　幽咽する新蘆管、淒涼たる古竹枝。
似臨猿峽唱。疑在鴈門吹。　猿峽に臨んで唱ふるに似、鴈門に在りて吹くかと疑ふ。
調爲高多切。聲緣小乍遲。　調高きが爲に多く切なり、聲小なるに緣つて乍ち遲し。
麤豪嫌觱篥。細妙勝參差。　麤豪觱篥を嫌ひ、細妙參差に勝る。
雲水巴南客。風沙隴上兒。　雲水巴南の客、風沙隴上の兒。
屈原收淚夜。蘇武斷腸時。　屈原淚を收むる夜、蘇武腸を斷つ時。
仰秣胡駒聽。驚棲越鳥知。　仰ぎ秣うて胡駒聽き、驚き棲んで越鳥知る。

何言胡越異。聞ㇾ此一同悲。　何ぞ言はん胡越異りと、此を聞かば一に同じく悲まん。

【字解】【一】嗚咽　むせびかなしむ。【二】淒涼　悽愴なり。古竹枝は樂府の名。【三】猿峽　瞿塘峽・巫峽・西陵峽をいふ。三峽の中長さ七百里、兩岸の連山斷處なし、山に猿多し、其聲甚だ哀し。【四】鷹門　もと戰國時代の趙の地。ここに關を置き胡に備ふ。【五】蠻藥　樂器の名。もと龜茲より出で傳へて支那に入る。【六】參差　樂器の名。卽ち洞簫。楚辭に、吹二參差一其誰思とある。【七】巴南　巴は古の國の名。今の四川省に屬す。【八】隴上兒　胡を伐つ爲に隴山の附近に遠征する兵士。【九】仰秣　荀子勸學篇に、瓠巴鼓ㇾ瑟、而流魚出聽、伯牙鼓ㇾ琴、而六馬仰秣とある。【一〇】越鳥　南方の越國の鳥。古詩に、胡馬嘶二北風一、越鳥巢二南枝一とある。

【題義】蘆管（胡の樂器で蘆を截つて作る）の聲を聽いて作つた詩である。

【詩意】咽び悲む蘆管の聲を聞けば、恰も悽愴たる古竹枝の聲を聞くが如く、三峽の猿聲を聽くかと疑はれ、鷹門の胡兵が吹くのかと思はれる。その調子が高いので殊に痛切に感じ、聲が小さいので乍ち遲緩する。此に比べては蠻藥の粗豪なるを嫌ひ、音の細妙なことは參差に勝る程である。巴南の雲水に身を寄せる人や、風沙を冒して隴山に征戍する兵士が聽いたらば、屈原や蘇武のやうに淚を揮ひ腸を斷つであらう。胡馬も仰ぎ秣ひつつ耳を傾け、越鳥も木に棲つて驚き聽くであらう。胡と越との差別なく皆同じく悲むに相違ない。

送二滕庶子致仕歸一婺州一

滕庶子の致仕して婺州に歸るを送る

春風秋月攜ㇾ歌酒。
八十年來翫二物華一。
已見曾孫騎二竹馬一。
猶聽侍女唱二梅花一。
入ㇾ鄉不ㇾ杖歸時健。
出ㇾ郭乘ㇾ軺到處誇。
兒著二繡衣一身衣ㇾ錦。
東陽門戸勝二滕家一。

【字解】【一】物華　萬物の菁華。王勃の滕王閣序に、物華元寶、龍光射二斗牛之墟一とある。【二】梅花　笛曲梅花落なり。【三】入ㇾ鄉不ㇾ杖　禮記に、五十杖二于家一、六十杖二于鄉一、七十杖二于國一、八十杖二于朝一とある。【四】軺　一馬の車。【五】繡衣　御史の服。衣ㇾ錦は功成り名遂げて故鄉に歸ること。【六】東陽　今の浙江省金華縣。

【題義】滕庶子（庶子は官名）の官を辭して婺州（今の浙江省金華縣）に歸るのを送つた詩である。

【詩意】滕庶子は非常に長壽な人で八十年來春風秋月を賞して歌酒の遊を肆にし、今はその曾孫が既に竹馬に乘つて遊ぶ位の年齡になり、侍女の梅花落の曲を歌ふのを聽いて樂む程達者である。されば鄉に入りても杖などはつかず、城市を出て馬車に乘り、自ら身の健を誇つてゐる。況んや其息子が御史の官に居り自分は錦を著て故鄉に歸るのだから、婺州第一の名家と謂つてよい。

送劉郎中赴任蘇州

劉郎中の任に蘇州に赴くを送る

仁風膏雨去つて隨ひ輪。
勝境歡遊到りて身を逐ふ。
水驛路は穿つ兒店の月、
花船棹は入る女湖の春。

語兒店。女墳湖。皆勝地也。

宣城獨り詠ず窗中の岫、
柳惲單り題す汀上の蘋。
何ぞ似かん姑蘇の詩太守、
吟詩相繼いで三人あるに。

領二吳郡一日。劉嘗贈レ予詩云。蘇州刺史例能レ詩。西掖今來替二左司一。故有二三人之歎一耳。

【題義】劉禹錫（主客郎中たり）の蘇州刺史となつて赴任するのを送つた詩である。

【詩意】君は爲政者として立派な成績を擧げたので、仁風膏雨が君の車に隨つて共に去り、到る處勝境に歡遊を肆にすることが出來る。水驛の路を行きては語兒店の月を賞し、花見の船を漕いでは女墳湖に入る。昔宣城太守謝朓は只獨り窗中から見える山を詠じ、吳興太守柳惲も獨り汀上の白蘋を詠じたが、蘇州刺史の三代續いて詩の上手なのとは比べものにならない。

【字解】【一】宣城　南齊の謝朓、字は玄暉、尤も五言詩に長ず。曾て宣城太守となる。【二】柳惲　梁の人、詩に巧なり。武帝の時吳興太守となる。其詩に汀洲采二白蘋一、日暮江南春とある。【三】姑蘇　蘇州なり。【四】三人　韋應物・白居易・劉禹錫。

福先寺雪中餞劉蘇州

福先寺にて雪中劉蘇州を餞す

送レ君何處展二離筵一。
大梵王宮大雪天。
庾嶺梅花落二歌管一。
謝家柳絮撲二金田一。
亂從二紈紬一交加舞。
醉入二籃輿一取次眠。
却笑召レ鄒兼訪レ戴。
只持二空酒一駕二空船一。

君を送りて何の處にか離筵を展ぶる、
大梵王宮大雪の天。
庾嶺の梅花歌管に落ち、
謝家の柳絮金田を撲つ。
亂れて紈紬に從つて交加して舞ひ、
醉うて籃輿に入りて取次に眠る。
却つて笑ふ鄒を召し兼ねて戴を訪ひ、
只空酒を持ちて空船に駕せしを。

金田は寺の異稱。宋之問の九日登二慈恩寺浮圖一詩に、散レ花多寶塔、張レ樂布金田とある。【五】紈紬　白絹の袖。謝惠連の雪賦に、皓鶴奪レ鮮、白鷴失レ素、紈袖慙レ冶、玉顏掩レ嫮とある。交加は錯雜すること。杜甫の詩に種レ竹交加翠とある。【六】籃輿　竹片を編んだ

で作つた駕籠。●取次は次第にの意。樂天の詩に醉把二花枝一取次吟とある。【七】●召レ郗●　郗陽を召す。謝惠連の雪賦に、梁王不レ悅、遊二於兎園一、乃置二旨酒一命二賓友一、召二鄒生一、延二枚叟一とある。●訪レ戴●は王徽之、字は子猷の山陰に居りし時、夜雪初めて霽るるや、月に乘じ、舟を泛べて剡溪に戴逵を訪ひ、門に及んで返る。人其故を問ふ。曰く興に乘じて來り、興盡きて返る。何ぞ必ずしも戴を見んと。

【題義】福先寺（長安に在り）で雪中に蘇州刺史劉禹錫の爲に送別の宴を開いた時の作である。

【詩意】福先寺で大雪の日に君の爲に送別の宴を張つた。席上では柳絮の飛ぶが如き雪を眺めながら梅花落の曲を奏し、紈袖を聯ね入り亂れて醉舞し、駕籠の中に夢を載せて思ひ思ひに退散した。昔梁王が鄒陽を召したり、王徽之が戴逵を訪うたりしたのは、ただの酒を持ち、ただの船に乘つたに過ぎない。吾等の今日の宴に比すれば如何にも物足らぬ感じがする。

除夜言レ懷兼贈二張常侍一

除夜懷を言ふ、兼ねて張常侍に贈る

（一）三百六旬今夜盡。　三百六旬今夜盡き、
六十四年明日催。　六十四年明日催す。
不レ用歎身隨レ日老。　用ひず身の日に隨つて老ゆるを歎くを、
亦須レ知二壽逐一レ年來一。　亦須らく壽の年を逐うて來るを知るべし。
加二添雪興一憑二氈帳一。　雪興を加添して氈帳に憑り、
消二殺春愁一付二酒杯一。　春愁を消殺して酒杯に付す。
唯恨詩成君去後。　唯恨む詩成る君去つて後、
紅箋紙卷爲レ誰開。　紅箋紙卷誰が爲にか開かん。

【字解】【一】除夜　大晦日の晩。張常侍は散騎常侍張仲方である。後集卷四に見ゆ。【二】三百六旬　一年三百六十日。【三】雪興　雪見の興。氈帳は毛氈のとばり。

【題義】大晦日の晩に感懷を述べ、兼ねて張仲方に贈つた詩である。六十四年明日催とあるから太和八年の作であらう。

【詩意】今年も愈〻今夜で最後の幕を閉ぢ、明日は僕も六十四歳になるのだ。身の一日增に老ゆるを歎かんよりは、寧ろ一年毎に長壽に上るのを祝すべきである。因つて雪見の興を添へんが爲に氈帳に憑り、春愁を消却せんが爲に酒杯を擧げた。ただ遺憾なことは君が去つて後に詩が出來たので、折角の詩箋も見てもらふ人がない。

送二張常侍西歸一

張常侍の西歸を送る

（一）二年花下閒伴　二年花下閒伴となる、
一旦樽前棄二（二）老夫一。　一旦樽前老夫を棄つ。
西午（三）橋街行悵望。　西午橋街行くゆく悵望し、

【字解】【一】二年　太和七年八年の二年間。閒伴は閒遊の仲間。【二】老夫　樂天自ら謂ふ。【三】

南龍興寺立踟躕。
洛城久住留情否。
省騎重歸稱意無。
出鎭歸朝但相訪。
此身應不離東都。

【題義】張仲方（前の詩を見よ）は太和の初に出でて福州刺史兼御史中丞福建觀察使となり、三年、入りて太子賓客となり、五年四月、右散騎常侍に轉じ、七年、李德裕の政を輔くるに及んで、出だされて太子賓客分司東都となり、八年、李德裕相を罷め、李宗閔復た彼を召して散騎常侍となした。この詩は再び散騎常侍に任ぜられて西の長安に歸るのを送つた作である。

【詩意】君は二年間遊仲間となつて我と俱に花を賞したが、忽ち別れの杯を酌み我を棄てて長安に去ることになり、西の午橋街をば行くゆく悵望し、南龍興寺に立つて暫く徘徊した。洛陽には久しく住み慣れたことであるから後髪を引かれる思がするであらう。併し再び散騎常侍に任ぜられて長安に歸るのも萬更わるい氣持はしまい。今後都を出て地方官になるとも、又歸つて朝官となるとも、必ず僕を訪うてくれよ。僕は當分洛陽を離れるやうなことはあるまいから。

七九〇

午橋街　洛陽の街名。【四】南龍興寺　洛陽に在る寺の名。後集卷十に南龍興寺殘雪と題する詩あり。踟躕　は徘徊といふが如し。【五】洛城　洛陽。【六】省騎　散騎常侍。【七】東都　洛陽をいふ。

和河南鄭尹新歲對雪

河南鄭尹の新歲雪に對するに和す

白雪吟詩鈴閣開。
故情新興兩徘徊。
昔經勤苦照書卷。
今助歡娛飄酒杯。
楚客難酬郢中曲。
吳公兼占洛陽才。
銅街金谷春知否。
又有詩人作尹來。

●●吳公　漢の上蔡の人。文帝の時河南守となる。治平天下第一たり。ここは河南尹鄭氏に比す。●●銅街　洛陽に銅駝街あり。當時亦銅街と稱す。庾信の文に銅街柳市とある。●●金谷は洛陽の西の地名。晉の石崇の園のありし處。

【字解】【一】鈴閣　將帥の居る處。鈴閣ともいふ。晉書羊祜傳に、鈴閣之下、侍衞者不レ過二數十人一とある。【二】照二書卷一　晉書孫康傳に、孫康少清介、家貧無レ油、嘗映レ雪讀レ書、後官至二御史大夫一とある。【三】楚客　樂天自ら謂ふか。郢中曲の郢は楚の都なり。宋玉の文に、客有下歌二於郢中一者上、其始曰二下里巴人一、國中屬而和者數千人、其爲二陽春白雪一、國中屬而和者不レ過二數十人一、以レ是其曲彌高、其和彌寡とある。【四】

【題義】河南尹鄭氏の新歲雪に對すと題する詩に和したのである。

【詩意】君は其役所に於て雪見の詩會を催し、故人の情と新雪の興とを併せ得た。さて雪は昔は孫康

の勤苦に伴つて書物を照し、今は歡娛を助けて酒席の前に飄つてゐる。君の作つた詩はすぐれた詩だから僕には到底唱和し難い。君は洛陽の賈誼の才を兼ねてゐると評してよい。君のやうな詩人が河南尹となつて來たことを、洛陽の春が若し知つたならば、定めて大に喜ぶであらう。

吹㆑笙内人出家　笙を吹く内人出家す

雨露難㆑忘君念重。　雨露忘れ難く君が念重く、
電泡易㆑滅妾身輕。　電泡滅し易く妾が身輕し。
金刀已剃頭然髮。　金刀已に剃る頭然ゆるの髮、
佛經云。若救㆓頭然㆒
玉管休㆑吹腸斷聲。　玉管吹くを休む腸斷つの聲。
新戒珠從㆓衣裏㆒得。　新戒の珠は衣裏より得、
初心蓮向㆓火中㆒生。　初心の蓮は火中に向つて生ず。
道場夜半香花冷。　道場夜半香花冷かに、
猶在㆓燈前㆒禮㆓佛名㆒。　猶ほ燈前に在りて佛名を禮す。

【字解】〔一〕内人　女妓の宜春院に入る者を内人といひ、又前頭人といふ。上の前に在るを謂ふなり。〔二〕電泡　電光泡沫。〔三〕玉管　笙なり。〔四〕珠　念珠、珠數。〔五〕向㆓火中㆒生　法苑珠林に、若㆑據㆓火劫㆒、卽是初禪、若㆑約㆓火劫㆒、卽是二禪、若㆑約㆓風劫㆒、是其三禪とある。〔六〕道場　修道の處。〔七〕禮㆓佛名㆒　每年十二月十九日より二十一日まで三日間、過去現在未來の三千佛の御名を唱へ、年内の罪惡を懺悔する會を佛名會といふ。

【題義】笙を吹く宮妓の出家することを述べた詩である。

【詩意】天子樣から受けた雨露の惠の深いことは忘れ難いが、身の泡沫夢幻の如く果敢なきを悟つて佛道に歸依し、已に髮を剃りおろし、笙を吹くのも止め、新に戒律と珠數とを得て靑道心になりすまし、夜中に僧庵の香花の冷かな處で、猶ほ燈明に對して佛名を唱へてゐる。

醉中見㆓微之舊卷有㆒感　醉中微之の舊卷を見て感あり

今朝何事一霑㆑襟。　今朝何事ぞ一たび襟を霑す、
檢得君詩㆓醉後吟㆒。　君が詩を檢し得て醉後に吟ず。
老淚交流風病眼。　老淚交流す風病の眼、
春箋搖動酒杯心。　春箋搖動す酒杯の心。
銀鉤塵覆年年暗。　銀鉤塵覆うて年年暗く、
玉樹泥埋日日深。　玉樹泥埋めて日日深し。
聞道墓松高一丈。　聞道らく墓松高さ一丈と、
更無㆓消息㆒到㆓如今㆒。　更に消息なくして如今に到る。

【字解】〔一〕風病　中風。〔二〕春箋　詩を書いてある紙。詩卷。〔三〕銀鉤　書法の巧なるを歎する語。書苑に晉索靖草書絕代、名㆓銀鉤蠆尾㆒とある。〔四〕玉樹　材容の美に喩ふ。杜甫の飮中八仙歌に、皎如㆓玉樹臨㆓風前㆒とある。〔五〕如今　今日。

【題義】醉後元稹（字は微之）の舊詩卷を見て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】今朝は思ひがけもなく君の詩を搜し當て、醉後に吟じて涙を流し、中風に罹つた眼をうるほし、醉つた心を動搖した。君の書いた詩卷には塵が積つて年年黑くなり、玉樹にも比すべき君の身は泥に埋められて既に久しくなつた。聞けば君の墓に植ゑた松は高さが一丈にもなつたさうだが、今日まで何の消息もなく過して來た。

壽安歇馬重吟

春衫細薄馬蹄輕。
一日遲遲進一程。
野棗花含新蜜氣。
山禽語帶破匏聲。
垂鞭晩就槐陰歇。
低倡閒衝柳絮行。
忽憶家園須速去。
櫻桃熟せんと欲し筍應に生ずべし。

【題義】壽安山（後集卷八、題に噴玉泉と題する詩の自注に見ゆ）の麓に馬を歇めて重ねて吟じた詩である。

【詩意】春著の薄きも快く馬の步みも輕いが、あたりの景色に見とれて一日僅に一驛を進むに過ぎない。野邊の棗の花は新蜜の氣を含み、山禽の聲は破れ匏のやうに聞える。夕方馬を駐めて槐の木蔭に憩ひ、又小聲に詩を歌ひつつ柳絮の飛ぶ中を衝いて行つた。忽ち故郷にも最早春が闌になり、櫻桃も實り大好物の筍も生えるであらうことを思ひ出し、急いで歸らうといふ氣になつた。

【字解】【一】一程　一站、一驛なり。【二】野棗　野生のナツメ。【三】柳絮　柳花旣に實りて其種子の上帶に叢毛あり、風に隨つて飛ぶこと絮の如し。故に此名あり。【四】家園　故鄉。【五】櫻桃　さくらんぼ。

贈張處士山人

蘿襟蕙帶竹皮巾。
雖到塵中不染塵。
每見俗人多慘澹。
惟逢美酒卽殷勤。
浮雲心事誰能會。

【字解】【一】蘿襟蕙帶　隱者の服。楚辭に若レ有レ人二兮山之阿一、披二薜荔一兮帶二女蘿一とある。竹皮巾は竹の皮の頭巾。【二】塵中　俗世間。【三】慘澹　憂惱なり。【四】殷勤　ねんごろなること。【五】風標　風格といふが如し。樣子。【六】三生

老鶴風標(五)不ㇾ可ㇾ親。　老鶴の風標親むべからず
世說二三生(六)一如ㇾ不ㇾ謬。　世三生を說く謬らざるが如し、
共疑巢許(七)是前身。　共に疑ふ巢許是れ前身ならんと。

と許由。堯の位を讓らんとするを聞き、辭し去りし高士。

【題義】張山人（處士とは隱居して仕へざる人をいふ）に贈つた詩である。

【詩意】君は蕙蘿の服をまとひ竹皮の頭巾をかぶり、たとひ俗界に來ても世の汙に染まらず。俗人を見れば毎に憂惱するが、ただ酒に逢へば至極機嫌がよい。浮雲の如きこだはりなき心持は常人の理解し得る所ではなく、又老鶴の如き高尙な風格は容易に狎れ親み難い。世間では三世轉生といふ事を說くがそれは眞理らしく思はれる。何となれば誰でも君の前生は巢許だらうと謂はない人はないから。

池畔閒坐。兼呈二侍中一

池畔最平處。樹陰新合時。
移ㇾ牀解二衣帶一。坐任二淸風吹一。
擧ㇾ棹鳥先覺。垂ㇾ綸魚未ㇾ知。
前頭何所ㇾ有。一卷晉(二)公詩。

【字解】〔一〕侍中　官名。侍中晉公裴度を指す。〔二〕前頭　吾が前。〔三〕晉公　晉國公の略。裴度は晉國公に封ぜられた。

【題義】池畔に閒坐した時の詩で裴度に呈したのである。

【詩意】池畔の最も平な處に樹陰が深く繁り合つてゐる。そこに牀を移して衣帶を解き、坐して淸風の吹くに任す。棹を擧ぐれば鳥先づ覺り、綸を垂るるも魚未だ知らず。前頭何の有る所ぞ、一卷晉公の詩。

初冬卽事。憶二皇甫十一

冷竹風成ㇾ韻。荒街葉作ㇾ堆。
欲ㇾ尋二聯句卷一。先飮二煖寒杯一(一)。
帽爲ㇾ迎ㇾ霜戴。爐因ㇾ試ㇾ火開。
時時還有ㇾ客。終不ㇾ當二君來一。

【字解】〔一〕煖寒杯　接待酒。開元遺事に、王元寶每二大雪一、令ㇾ僕自二門巷一掃ㇾ雪爲ㇾ徑路一、以迎ㇾ賓、具二酒炙一宴ㇾ樂之一、爲二煖寒之會一とある。

【題義】初冬眼前の狀況を敍し、兼ねて皇甫朗之（十は輩行）を憶うた詩である。

【詩意】竹を吹く風の音も高く、街頭には落葉が堆く積つてゐる。聯句の相手でも尋ねようとして、

先づ接待酒にありついた。帽は霜を迎ふる爲にかぶり、爐は火を試みる爲に開いて見た。時時客が來るは來るけれども、君の來てくれたやうなわけには行かない。

小庭寒夜。寄夢得

小庭寒夜、夢得に寄す

庭小同蝸舍。門閒稱雀羅。
庭小にして蝸舍に同じく、門閒にして雀羅に稱ふ。

火將燈共盡。風與雪相和。
火は燈と共に盡き、風は雪と相和す。

老睡隨年減。衰情向夕多。
老睡年に隨つて減じ、衰情夕に向つて多し。

不知同病者。爭奈夜長何。
知らず同病の者、夜の長きを爭奈何する。

【字解】〔一〕蝸舍　蝸牛の家。〔二〕雀羅　雀を捕へる網。漢書に下邽翟公爲二廷尉一、賓客塡レ門、及レ廢門外可レ設二雀羅一とある。〔三〕同病者　夢得を指して言ふ。

【題義】寒夜に劉禹錫（字は夢得）に寄せた詩である。第一句に庭小云云とあるから、題に小庭の二字を冠したのであらう。

【詩意】吾が庭は小さくて蝸の家のやうである。訪ふ人もなく雀ばかり居て網でも張らうかと思ふ。夜に入りては燈と共に火種も盡き、風は雪に和して吹き荒れてゐる。老いては一年增に睡れなくなり、夜になると特に心細さを感ずる。一體僕と病を同じうする君は、どうして此夜長を過してゐるか。

西還壽安路西歇馬

西還壽安の路の西にて馬を歇む

槐陰歇鞍馬。柳絮惹衣巾。
槐陰鞍馬を歇むれば、柳絮衣巾を惹く。

日晚獨歸路。春深多思人。
日は晩る獨り歸る路、春は深し思多き人。

去家纔百里。爲客只三旬。
家を去つて纔に百里、客と爲る只三旬。

已念紗窗下。應生寶瑟塵。
已に念ふ紗窗の下、應に寶瑟の塵を生ずべきを。

【題義】西の長安から還り壽安山（前に見ゆ）の西で馬を歇めて休息した時の作である。

【詩意】槐の木陰に馬を駐めて休息すれば、柳絮が飛散して衣巾に附きまとふ。日晩れ獨り歸る時、春も闌になつて感慨が深い。家を去ることは纔に百里、客となつたことは只三十日に過ぎないが、紗窗の下の吾が瑟が今頃は塵が積つてゐるであらうと思へば、何となく歸りが急がれる。

雨中訪崔十八

雨中崔十八を訪ふ

肩舁仍挈榼。莫怪就君來。
肩舁仍ほ榼を挈へ、怪む莫れ君に就き來るを。

秋雨經三宿。無人勸一杯。
秋雨三宿を經れども、人の一杯を勸むるなし。

【字解】〔一〕肩舁　人の舁く駕籠。榼は酒樽。

【題義】雨を冒して崔玄亮（十八は輩行、前に見ゆ）を訪うた詩ある。

【詩意】駕籠に乗り酒樽を擔へて君を來り訪ふことを怪むな。鬱陶しい秋の雨に三晩留宿しても、一杯の酒をも勸めてくれる人がないから、君の處へ來たのである。

夢得得新詩

池上今宵風月涼。
閒敎少樂理霓裳。(一)
集仙殿裏新詞到。
便播笙歌作樂章。

【題義】劉禹錫（字は夢得）の新詩を得たことを述べた詩である。

【詩意】今夜は池の上の風が涼しく月も冴えてゐるので、閒に音樂を催して霓裳の曲などを奏せしめてゐた所が、折しも集賢殿に夢得から新詞が屆いたので、早速笙歌に倚せて歌はしめた。

初見劉二十八郎中有感

欲話毘陵君反袂。(一)
夏口言我霑衣。
誰知臨老相逢日。
悲歎聲多語笑稀。

【題義】初めて劉二十八郎中を見て感ある

【詩意】毘陵を話らんと欲すれば君袂を反し、夏口を言はんと欲すれば我衣を霑す。誰か知らん老に臨んで相逢ふの日、悲歎の聲多くして語笑稀なるを。

【題義】久し振で都に徵され主客郎中に任ぜられた劉禹錫（二十八は輩行）に會つて感ずる所を述べた詩である。

【詩意】毘陵の事を語らうと思へば君が涙を拭ひ、夏口の事を言はうと思へば僕が涙を流す。老年になつて久し振で逢つたのに、面白い話の種もなく愁嘆話ばかりしようとは實に思ひもかけぬことである。

【字解】【一】霓裳　樂曲の名。
【二】集仙殿　開元十二年改めて集賢殿といふ。樂天は元和二年集賢校理となつた。

【字解】【一】毘陵　今の江蘇省武進縣治。晉陵ともいふ。反レ袂　袂は涙を拭ふこと。公羊傳に、孔子拭レ面、涕沾レ袍曰、吾道窮矣とある。【二】夏口　今の湖北省武昌縣。

夜題玉泉

遇レ客多言愛山水。
逢レ僧盡道厭囂塵。
玉泉潭畔松間宿。
要且經年無二一人一。

【題義】夜玉泉寺（玉泉山は河南縣の東南四十里に在り。山內に玉泉寺あり。杭州の玉泉ではない）

夜玉泉に題す

客に遇へば多く言ふ山水を愛すと、
僧に逢へば盡く道ふ囂塵を厭ふと。
玉泉潭畔松間の宿、
要且年を經て一人無し。

に題した詩である。

【詩意】客に遇へば皆この地の山水を愛すといひ、僧に逢へば世の塵囂を避けて此處に居るのだといふ。玉泉潭の畔の松樹の間の庵は、實に其言の通りで俗客は一年中殆ど一人も來ない。

拜表早出。贈二皇甫賓客一　拜表早に出で、皇甫賓客に贈る

一月一回同拜表。　一月一回同じく拜表す、
莫レ辭侵レ早過二中橋一。　辭する莫れ早を侵して中橋を過ぐるを。
老於君者應二無數一。　君より老ゆる者應に無數なるべし、
猶趁西京十五朝。　猶ほ趁ふ西京十五朝。

【字解】【一】拜表　陛下に章奏をたてまつること。【二】侵レ早　朝早く。【三】西京　長安をいふ。

【題義】拜表の爲に朝早く外出し太子賓客（官名）皇甫湜に贈つた詩である。

【詩意】君と僕とは一箇月に一回倶に拜表する例で、今日も朝早く中橋を渡つて參朝するのであるが、君は決して其勞苦を厭はぬであらう。君より老いた者はいくらもあるが、それ等の人の中には長安まで出勤すること十五代に及ぶ者さへあるのだから。

贈二鄭尹一　鄭尹に贈る

府池東北舊亭臺。　府池の東北舊亭臺、
久別長思醉一回。　久別長思醉ふこと一回す。
但請二主人一空掃地。　但主人に請ふ空しく地を掃はんことを、
自攜二杯酒管絃一來。　自ら杯酒管絃を攜へて來る。

【字解】【一】府池　河南尹の役所の構内に在る池。【二】主人　鄭尹を指して言ふ。

【題義】河南尹鄭氏（前に見ゆ）に贈つた詩である。

【詩意】河南尹の役所の構内の池の東北に在る亭臺は、別れて後も常に心に忘れずに居るので（樂天は嘗て河南尹であつた。）久し振で來て一杯傾けた次第だ。それも君には厄介をかけないつもりで、只庭の掃除だけ賴んで、杯酒や管絃は自分で持參したわけである。

別二楊同州一後却寄　楊同州に別れて後却つて寄す

潘驛橋南醉中別。　潘驛橋南醉中に別れ、
下邽郇北醒時歸。　下邽郇北醒時に歸る。
春風怪レ我君知否。　春風我を怪む君知るや否や、
楡葉楊花撲レ面飛。　楡葉楊花面を撲つて飛ぶ。

【字解】【一】下邽　縣名。故城今の陝西省渭南縣の東北に在り。

【題義】別楊同州後却寄

【詩意】

【題義】同州刺史楊汝士（後集卷十三に見ゆ）に別れて後、こちらから更に寄せた詩である。

【詩意】潘驛の橋の南で離杯を酌みかはして別れ、丁度その酒の醒める頃に下邽の吾が村に歸つた。春風が俺を怪しと睨んだものか、楡の葉や楊の花が盛に落ちて來ては、俺の顏を撲つた。

狐泉店前作

狐泉店前の作

野狐泉上柳花飛。　野狐泉上柳花飛び、
逐レ水東流便不レ歸。　水を逐ひ東流して便ち歸らず。
花水悠悠(一)兩無レ意。　花水悠悠兩ながら意無し、
因レ風吹落偶相依。　風に因り吹き落されて偶ま相依る。

【字解】〔一〕悠悠　遙遠なる貌。

【題義】狐泉の上の店前で作つた詩である。

【詩意】狐泉の上の柳の花が水上に落ち、東に流れて復たと歸らない。花と水とは、もともと離れられないほど實意があるのではないが、ただ風に吹き落されて偶然深い縁故を結んだのである。

贈二盧績一

盧績に贈る

餘杭縣裏盧明府。　餘杭縣裏の盧明府、

【字解】〔一〕餘杭　縣の名。浙江省杭州府に屬す。明府は縣令の稱。

虛白亭中白舍人。　虛白亭中の白舍人。
今日相逢頭似レ雪。　今日相逢うて頭雪に似たり、
一杯相勸送二殘春一。　一杯相勸めて殘春を送る。

【題義】盧績に贈つた詩である。

【詩意】君は嘗て餘杭縣令であり、僕は杭州刺史として虛白亭にゐたこともあつたが、今日久し振で逢つて見ると俱に白髮の老人となり、共に酒酌みかはして殘春を送つてゐる。實に歳月の立つのは早いものだ。

【字解】〔一〕虛白亭　杭州に在る亭の名。樂天の冷泉亭記に詳なり。白舍人は樂天自ら謂ふ。嘗て中書舍人であつたから。

與二裴華州一同過二敷水一戲贈

裴華州と同じく敷水を過ぎ、戲れに贈る

使君五馬且踟躕。　使君の五馬且踟躕す、
馬上能聽二絕句一無。　馬上能く絕句を聽くや無や。
每レ過二桑間一試留レ意。　桑間を過ぐる每に試みに意を留めよ、
何妨後代有二羅敷一。　何ぞ妨げん後代羅敷あるを。

【字解】〔一〕使君　刺史の稱。五馬は太守の馬。〔二〕絕句　垣絕の文句。〔三〕羅敷　趙王の家令王仁の妻なり。桑を陌上に採りし時、趙王之を見て悅び、奪はんと欲す。羅敷、陌上桑の詩を作りて自ら夫あるを明かにす。趙王乃ち止む。

【題義】華州刺史裴氏と倶に敷水を過ぐる時贈つた詩で、羅敷の故事を引いて戯れたのである。

【詩意】華州刺史たる君の馬がはかばかしく進まないやうだが、羅敷の拒絶の詩でも聴いたのではないか。桑畠のあたりを通る時には用心するがよい。今の世にも羅敷がゐないものでもないから。

閒遊　閑遊

欲レ笑隨レ情酒逐レ身。　笑はんと欲す情に随つて酒身を逐ふを、
此身雖レ老未レ辜レ春。　此身老いたりと雖も未だ春に辜かず。
春來點檢閒遊數。　春來點檢するに閑遊数と為り、
酒自多二於年少人一。　酒自ら年少の人より多し。

【題義】閒遊のことを述べた詩である。

【詩意】心に任せて酒に耽るのは自分ながら可笑しい程だが、たとひ老いたりと雖も春に負きたくないと思へばこそで、これも已むを得ないのである。併し算へて見ると度度閒遊して、自然若い者よりも多く飲んだわけだ。

招二韜光禪師一　出二潛說友咸淳臨安志一。

韜光禪師を招く　潛說友の咸淳臨安志に出づ。

白屋炊二香飯一。葷膻不レ入レ家。
濾レ泉澄二葛粉一。洗レ手摘二藤花一。
青芥除二黃葉一。紅薑帶二紫芽一。
命レ師相伴食。齋罷一甌茶。

【字解】〔一〕白屋　漢書に士或起二白屋一而致二三公一とあり、注に白屋者、白蓋之屋、以レ茅覆レ之、賤人所レ居とある。〔二〕葷膻　臭氣ある野菜及び腥き肉。〔三〕濾レ泉　紗葛等を用ひて水をこすを濾といふ。沈澱して之を清むるを澄といふ。〔四〕青芥　野菜の名。〔五〕齋　僧に飯せしむること。一甌は一瓶。

【題義】韜光禪師を招いた詩である。咸淳臨安志に、「法安院は靈隱寺（杭州に在り）の西に在り。天福二年吳越王建つ。唐の長慶中、詩僧あり菴を院の西に結び、自ら韜光と號す。常に樂天と唱和す」とあり。又「白侍郎（樂天）長慶四年正旦、韜光を請じて齋せんとし詩を以て之を招く。卽ち白屋炊二香飯一の一首なり。韜光齋に赴かず。詩を以て白に報いて云く、山僧野性好二林泉一。毎向二巖阿一倚レ石眠。不レ解栽レ松陪二玉勒一。惟能引レ水種二金蓮一。白雲乍可レ來二青嶂一。明月難レ教レ下二碧天一。城市不レ能二飛レ錫去一。恐レ防二鶯囀翠樓前一。と」とある。

【詩意】香飯を炊ぎ、葷膻を遠ざけ、葛粉を用ひて泉の水を濾し、手を洗つて藤の花を摘み、青芥の枯葉を取り去り、紅薑に紫芽を添へ、禪師を招待して齋せしめ、食後に一杯の澁茶を差上げたいもの

だ。どうか來てはくれまいか。

和柳公權登齊雲樓〔一〕　以下出二范成大吳郡志一。

柳公權の齊雲樓に登るに和す　以下范成大の吳郡志に出づ。

樓外春晴百鳥鳴。　樓外の春晴、百鳥鳴き、
樓中春酒美人傾。　樓中の春酒美人傾く。
路傍花日添二衣色一。　路傍の花は日に衣色を添へ、
雲裏天風散二珮聲一〔二〕。　雲裏の天風は珮聲を散ず。
向レ此高吟誰得レ意。　此に向つて高吟して誰か意を得る、
偶來閒客獨多情。　偶〻來る閒客獨り多情。
佳時莫レ起二興亡恨一。　佳時起す莫れ興亡の恨、
遊樂今逢二四海清一。　遊樂今逢ふ四海の清きに。

【題義】柳公權（元和の初の進士で太子太師に累官し書を善くし自ら一家を成した）の齊雲樓（江蘇省吳縣治後の子城の上に在り。吳地記に「唐朝の恭王の建つる所云云」とある）に登つた詩に和した

【字解】〔一〕珮聲　腰に佩びる玉環の聲。

のである。

【詩意】樓外には春晴に方つて諸〻の鳥が囀り、樓中には數多の美人が美酒を傾けてゐる。路傍の花は日增しに色を增して著物に映り、空吹く風は珮玉の聲を四方に散ずる。此景に對して誰が得意になつて高吟するであらう。偶〻來り登つた閒客（暗に柳公權を指す）は最も感慨に驅られた。併し今は天下泰平の結構な時代であるから、妄に興亡の恨などは起さぬがよい。

毛公壇

毛公壇上片雲閒。　毛公壇上片雲閒なり、
得レ道何年去不レ還。　道を得て何の年か去つて還らざる。
千載鶴翎歸二碧落一。　千載鶴翎碧落より歸り、
五湖空鎭萬重山。　五湖空しく鎭す萬重の山。

【題義】范成大の吳郡志に、「毛公壇福地は洞庭山に在り。漢の劉根の道を得たる處なり。根既に仙し、身に綠毛を生ず。人或は之を見たり。故に之を名づけて毛公といふ」とある。

【詩意】毛公の壇の上に一片の雲が靜に浮んでゐる。ここは昔毛公が登仙し去つた處なさうだ。千年を經た今日では鶴が天空から下つて來て、五湖のあたりの萬重の山を鎭してゐる。

【字解】〔一〕千載　千年。鶴翎　鶴の羽。道家にて天空を稱して碧落といふ。〔二〕五湖　江蘇・浙江二省に跨る太湖の別名。

靈巖寺　　靈巖寺

館娃宮畔千年寺。　館娃宮畔千年の寺、
水闊雲多客到稀。　水闊く雲多くして客到ること稀なり。
聞說春來更惆悵。　聞說らく春來更に惆悵、
百花深處一僧歸。　百花深き處一僧歸ると。

【題義】靈巖山は江蘇省吳縣の西に在り。吳王館娃宮を此に置く。靈巖寺は卽ち其地なりといふ。

【詩意】この靈巖寺は、今より千年の昔館娃宮の傍に建てたもので、池が闊く雲が深く罩め、訪ふ人も稀である。聞けば春になると百花の咲き亂れた處に淋しく一人の僧の歸るのを見て、一入人をして惆悵に堪へざらしめるさうだ。

白雲泉　　白雲泉

天平山上白雲泉。　天平山上の白雲泉、
雲自無心水自閒。　雲自ら無心にして水自ら閒なり。
何必奔衝山下去。　何ぞ必ずしも奔衝して山下に去り、
更添波浪向人間。　更に波浪を添へて人間に向はん。

【題義】方輿勝覽に、「天平山は城西二十里に在り、巍然として特り高し。羣峯拱揖す。郡の鎭なり。山上に白雲泉あり。吳中の第一水となす」とある。

【詩意】天平山の上の白雲泉は、無心の雲の棚曳く處に穩かに流れてゐる。「何も勢猛く山下に奔衝し、波を揚げて俗世間に入る必要はないではないか」と言ふものの如くに。

寄韜光禪師　　出東坡題跋。

韜光禪師に寄す　　東坡の題跋に出づ。

一山門作兩山門。　一山門は兩山門となり、
兩寺原從一寺分。　兩寺原一寺より分る。
東澗水流西澗水。　東澗の水は流る西澗の水、
南山雲起北山雲。　南山の雲は起す北山の雲。
前臺花發後臺見。　前臺花發いて後臺より見え、
上界鐘聲下界聞。　上界の鐘聲は下界に聞ゆ。
遙想吾師行道處。　遙に想ふ吾が師の道を行ふ處、
天香桂子落紛紛。　天香の桂子落ちて紛紛たるを。

【字解】〔一〕無心　陶淵明の歸去來辭に雲無心而出岫とある。

【字解】〔一〕人間　俗世間。　〔二〕天香桂子云云　駱賓王の靈隱寺と題する詩に、桂子月中落、天香雲外飄とある。

【題義】韜光禪師（前に見ゆ）に寄せた詩である。禪師はもと杭州の靈隱寺に住し後錫を天竺寺に移す。樂天が蘇州刺史たりし時、此詩を杭州に寄せたのである。咸淳臨安志に「靈山の陰、北澗の陽は卽ち靈隱寺、靈山の南、南澗の陽は卽ち天竺寺なり。二澗の流水は錢源泉と號す。寺峰の南北を繞りて下り、峯前に至り合して一澗となる。橋あり合澗と號す。」また「靈隱・天竺兩山は一門よりして入る」とある。

【詩意】一個の山門が兩寺の山門となつてゐる位で、もと靈隱・天竺の二寺は一寺が分れたものである。されば東澗の水は西澗に流れ、南山の雲は北山の雲を起し、前の高臺に花が咲けば後の高臺から見え、上の鐘樓で鐘をつけば下まで聞えるほどに關係が深い。想ふに禪師が佛の道を修めてゐる處には、昔の傳說の通り、月中の桂子が香氣を放ちて紛紛と落ちて來るであらう。

和夢得夏至憶蘇州呈盧賓客

以下出二泰興李氏手校宋本一

夢得の夏至に蘇州を憶ひ盧賓客に呈するに和す

以下泰興李氏手校の宋本に出づ。

憶在二蘇州一日。常諳夏至筵。
憶ふ蘇州に在りし日、常に諳んず夏至の筵。

糉香筒竹嫩。炙脆子鵝鮮。
糉香しくして筒竹嫩かに、炙脆くして子鵝鮮かなり。

水國多二臺榭一。吳風尙管絃。
水國臺榭多く、吳風管絃を尙ぶ。

家毎に皆酒あり、處として過船ならざるはなし。

印を交へて君相次ぎ、帷を褰ぐるは我前に在り。

此鄕俱に老いたり、東望共に依然たり。

洛下麥秋月、江南梅雨天。
洛下麥秋の月、江南梅雨の天。

齊雲樓上事、已に十三年に上れり。
齊雲樓上の事、已に十三年に上れり。

【字解】【一】糉　箬葉を以て糯米を裹み蒸煮して之を熟す。筒糉ともいふ。風土記に、端午進二筒糉一とある。【二】子鵝　鵝鳥の雛。【三】水國　蘇州は水多き地なり。【四】交レ印　官印を傳へたこと。前後して蘇州刺史となつたこと。後漢書賈琮傳に、琮爲二冀州一、停レ車垂二赤帷裳一、琮曰、刺史當二遠視廣聽一、糾二察美惡一、何垂二帷裳一以自掩乎、命褰レ之とある。【五】褰レ帷　刺史になること。【六】此鄕　洛陽を指して言ふ。【七】東望　蘇州の方を望む。依然は慕はしく感ずること。【八】洛下　洛陽。【九】齊雲樓　前の和二柳公權登二齊雲樓一を見よ。麥秋は麥の熟する時節。夏至の頃。

【題義】劉禹錫（字は夢得）が夏至の日に蘇州を憶うて太子賓客盧氏に呈した詩に和したのである。

【詩意】蘇州にゐた頃の事を憶うて、夏至の宴會の事がいつまでも忘れられない。若竹の筒に入れた糉の香も高く、鵝鳥の雛の燒肉も軟かで旨かつた。水に臨んで樓臺が多く、昔から音樂を好む風習があり、どこへ行つても酒があり、又船の通はない處もない。我先づ其地の刺史となり、君は其後を

襲いだのであつた。今は倶に此地に老い朽ちてゐるが、東蘇州を望めば何となく懐かしく感ずる。洛陽では今丁度麥秋の時節であるが、江南の蘇州では梅雨の氣節であらう。齊雲樓に登つて歡を盡したのも、指折り數ふれば已に十三年になる。

曲江

曲江

細草岸西東。酒旗搖水風。
細草岸の西東、酒旗水風に搖く。

樓臺在花杪。鷗鷺下烟中。
樓臺花杪に在り、鷗鷺烟中に下る。

翠幄晴相接。芳洲夜暫空。
翠幄晴れて相接し、芳洲夜暫く空し。

何人賞秋景。興與此時同。
何人か秋景を賞する、興此時と同じ。

【字解】【一】細草　細かな草。杜甫の旅夜書懐と題する詩に、細草微風岸、危檣獨夜舟とある。【二】酒旗　酒屋の軒に立ててある旗。【三】花杪　花の梢。【四】翠幄　綠色の幕を張つた茶店。【五】此時　春の時節。

【題義】春曲江（長安の園池の名）に遊んだ詩である。

【詩意】若草が東の岸にも西の岸にも生えてゐて、酒屋の軒先の旗が春風に飄り、花の梢には樓臺が聳え立ち、鷗や鷺が烟霞の中に飛び下り、翠の幕を張つた茶店が軒をならべて立ち、夜に入りて芳洲に暫く人跡が絶える。春の曲江の景は此の如く美しいが、秋の景色を賞する興味も決して春に劣らない。

歲夜詠懷兼寄思黯

歲夜懷を詠じ、兼ねて思黯に寄す

徧數故交親。何人得六旬。
徧く故交親を數ふるに、何人か六旬を得たる。

今年已入手。餘事豈關身。
今年已に手に入る、餘事豈身に關せんや。

老自無多興。春應不揀人。
老いては自ら興多きことなく、春は應に人を揀ばざるべし。

陶窗與弘閣。風景一時新。
陶窗と弘閣と、風景一時新なり。

【字解】【一】故交親　死んだ友人。【二】六旬　六十歳。【三】陶窗　陶淵明の家の窗。樂天已の宅に比す。弘閣は漢の丞相公孫弘の閣。牛僧孺の邸に比す。

【題義】

【詩意】徧く死んだ友達を數へて見るのに、六十まで生きた者は極めて稀である。命あつての物種だ。今年も早や手が附いたからには、他の事はどうでもよい。眼前の樂を盡すに限る。老いては自然感興も少くはなるが、併し春は貴賤老少を擇ばないから、僕のやうな貧家でも、君のやうな宰相の邸でも、正月に入つて忽ち景色が一新したのは嬉しい。

寒食日。過棗糰店

寒食棗糰店。春低楊柳枝。
酒香留客住。鶯語和人詩。
困立攀花久。慵行上馬遲。
若爲將此意。前字與僧期。

【字解】【一】寒食　冬至より百五日をいふ。棗糰店は驛の名であらう。未だ詳らかにせず、後考を待つ。

【題義】寒食の頃に棗糰店を過ぎて作つた詩である。

【詩意】寒食の頃に棗糰店を通つた所が、柳の枝が低く垂れ、酒の香が人を引留め、鶯が人の詩に和して鳴いてゐる。立つてゐるのに倦んで花の枝に攀ぢ登り、馬に乘つて行き去るのも大儀である。

宿張雲擧院

不食胡麻飯。杯中自得仙。
隔房招好客。可室致芳筵。
美醞香醪嫩。時新異果鮮。

【字解】【一】胡麻飯　續齊諧記に、永平中、劉晨・阮肇入天台山採藥、見二女、顏容絕妙、便喚劉阮姓名、因邀至家、設胡麻飯與食之とある。【二】隔房　別室といふが如し。【三】美醞　善く釀す。香醪は香ばしき濁酒。【四】時新　はつもの。隋書に、許善心母范氏有高節、高祖勅尚書、每獻時新、常遣分遺とある。

【題義】張雲擧の道院に宿した詩である。

【詩意】張雲擧の道院に宿した所が胡麻飯などは食はなくとも、酒を飮んだだけで既に仙人になり得たやうに思ふ。別室に宿してゐる客を招待し芳宴を張つたが、濁酒の出來具合も至極よろしく、初物の珍らしい果物も旨い。夜の深けるまで歡を盡して、ただ夜の明けるのを惜み、眠るのも忘れて坐り込み、碁を打つても好敵手のないのが物足りず、詩が一番先に出來たのは恐縮である。明朝此詩を壁に題したらば、誰か世間に傳へるであらう。

夜深唯畏曉。坐穩不思眠。
棊罷嫌無敵。詩成媿在前。
明朝題壁上。誰得衆人傳。

【字解】【一】胡麻飯　續齊諧記に、永平中、劉晨・阮肇入天台山採藥、見二女、顏容絕妙、便喚劉阮姓名、因邀至家、設胡麻飯與食之とある。【二】隔房　別室といふが如し。【三】美醞　善く釀す。香醪は香ばしき濁酒。【四】時新　はつもの。隋書に、許善心母范氏有高節、高祖勅尚書、每獻時新、常遣分遺とある。

【題義】張雲擧の道院に宿した詩である。

【詩意】張雲擧の道院に宿した所が胡麻飯などは食はなくとも、酒を飮んだだけで既に仙人になり得たやうに思ふ。別室に宿してゐる客を招待し芳宴を張つたが、濁酒の出來具合も至極よろしく、初物の珍らしい果物も旨い。夜の深けるまで歡を盡して、ただ夜の明けるのを惜み、眠るのも忘れて坐り込み、碁を打つても好敵手のないのが物足りず、詩が一番先に出來たのは恐縮である。明朝此詩を壁に題したらば、誰か世間に傳へるであらう。夜深けて唯曉を畏れ、坐すること穩かにして眠を思はず。碁罷んで敵なきを嫌ひ、詩成つて前に在るを媿づ。明朝壁上に題せば、誰か衆人に傳ふるを得ん。

惜花

可憐天豔正當時。
剛被狂風一夜吹。

【字解】【一】天豔　美しき貌。

憐むべし天豔正に時に當る、
剛に狂風に一夜に吹かる。

花を惜む

今日流鶯來舊處。(一)　今日流鶯舊處に來り、
百般言語泥空枝。(二)　百般の言語空枝に泥す。

【題義】花の散つたのを惜んだ詩である。

【詩意】今を盛りと唉き誇つた花をば夜半の嵐が吹き散らしてしまつた。今日鶯がもと花の唉いてゐた處へ來て、怨むが如く慕ふが如く、泣くが如く訴ふるが如く、花なき枝に棲まつて去りかねてゐる。

七夕

烟霄微月澹長空。　烟霄微月長空澹く、
銀漢秋期萬古同。(一)　銀漢秋期萬古同じ。
幾許歡情與離恨。　幾許か歡情と離恨と、
年年幷在此宵中。　年年幷せて此宵の中に在り。

嫁後遂廢織紝、天帝怒、責令歸河東、唯每年七月七日夜、渡河一會とある。

【題義】七月七日のことを詠じた詩である。

【詩意】今夜は天河を渡つて牽牛星と織女星とが相會ふのであるが、若し雨でも降れば水が增して渡れないことになるので、泣くも笑ふも今宵の中にあるのであるが、幸に今夜は烟棚曳く淡淡たる大空に微月が現れたから、年に一度の遇ふ瀨を樂むことが出來るであらう。

【字解】【一】銀漢　あまのがは。溫庭筠の詩に、銀漢橫レ空萬象秋とある。秋期は秋の會合。荊楚歲時記に、天河之東有二織女一、天帝之子也、年年織杼勞役、織二成雲錦天衣一、天帝憐二其獨處一、許二嫁河西牽牛郎一、

【二】流鶯　處定めず飛びまはる鶯。
【三】泥　停滯する。

宿誠禪師山房。題贈

誠禪師の山房に宿し、題して贈る

不レ出二孤峰上一。(一)人間四十秋。
孤峰の上を出でず、人間四十秋。
視レ身如二傳舍一。(二)閱レ世任二東流一。(三)
身を視ること傳舍の如く、世を閱て東流に任す。
法爲二因緣一立。心從二次第一修。
法は因緣の爲に立ち、心は次第に從つて修まる。
中宵問二眞偈一。(四)有住是吾憂。
中宵眞偈を問へば、有住是れ吾が憂。

【字解】【一】人間　世間。四十秋は四十年。【二】傳舍　宿屋。【三】東流　水流なり。【四】眞偈　佛家の唱ふる所の詞句を偈といふ。

【題義】誠禪師の庵室に宿して贈つた詩である。

【詩意】禪師は四十年間孤峰の上に住して全く世間に出ず、身は宿屋に在るが如くに思ひ、歲月の去るに任せて惑はず、諸法は因緣に依つて立ち、心は次第に從つて修る。中夜に眞偈を問うた所が、此世に住むのは吾が憂であると言ふ。

新池

數日自穿鑿。引泉來近陂。(一)
尋渠通咽處。繞岸待清時。
深好求魚養。閒堪與鶴期。
幽聲聽難盡。入夜睡常遲。

【字解】〔一〕陂　池なり。〔二〕咽處　流れの澁る處。

【題義】新に池を鑿ちしことを述べた詩である。

【詩意】數日かかつて池を掘り、泉の水を引いて此に溜めた。渠を尋ねて流の澁る處を疏通し、岸を繞つて水の清むのを待つた。深いことは魚を養ふに宜しく、閒靜なことは鶴と樂むに適する。その流るる聲は、いくら聽いても飽く時がないので、つい夜も寢るのが遲くなる。

南池

蕭條微雨絕。荒岸抱清源。(一)
入舫山侵塞。分泉道接郛。

【字解】〔一〕蕭條　淋しき貌。〔二〕淹泊　逗留する。〔三〕他宵　後日の夜。

【題義】秋日池上の景況を敍した詩である。

【詩意】淋しく降りそそいだ秋雨もやみ、荒れた岸が清い池を圍んでゐる。吾が乘る舟の中から城塞に續く山が見え、流を分つ道が遠村に接してゐる。秋風が附近の樹木を吹き鳴らし、月は汀の蒲の根に影をうつしてゐる。自分はいつまでも逗留したいと思つても、意に任せずして歸つたが、恐らく此の景が後日吾が夢に入り來るであらう。

秋聲依樹色。月影在蒲根。
淹泊方難遂。他宵關夢魂。

【字解】〔一〕蕭條　淋しき貌。〔二〕淹泊　逗留する。〔三〕他宵　後日の夜。

【題義】秋日池上の景況を敍した詩である。

【詩意】淋しく降りそそいだ秋雨もやみ、荒れた岸が清い池を圍んでゐる。吾が乘る舟の中から城塞に續く山が見え、流を分つ道が遠村に接してゐる。秋風が附近の樹木を吹き鳴らし、月は汀の蒲の根に影をうつしてゐる。自分はいつまでも逗留したいと思つても、意に任せずして歸つたが、恐らく此の景が後日吾が夢に入り來るであらう。

秋聲樹色に依り、月影蒲根に在り。
淹泊方に遂げ難し、他宵夢魂に關す。

宿池上

泉來從絕壑。亭敞在中流。
竹密無空岸。松長可絆舟。
蟅蛄潭上夜。河漢島前秋。
異夕期新漲。攜琴却此遊。

池上に宿す

泉は來りて絕壑より、亭は敞かにして中流に在り。
竹密にして空岸なく、松長くして舟を絆ぐべし。
蟅蛄潭上の夜、河漢島前の秋。
異夕新漲を期し、琴を攜へて却つて此に遊ばん。

【字解】【一】蟪蛄　蟬の類。【二】河漢　あまのがは。【三】異夕　他宵といふが如し。後日の夜。

【題義】秋夜池上に宿した詩である。

【詩意】泉は絕壁から流れ注ぎ、中流の處にひろびろとした亭がある。岸には隙間なく竹が密生し、松は舟を繫ぐのに宜しい。潭上に夜蟪蛄の鳴くのを聽き、島前に天河の横はるのを眺めては、愉快此上もない。いつか新に水の漲つた夜を期して、琴を攜へて復た遊びに來ようと思ふ。

翻經臺　出二咸淳臨安志一。　翻經臺　咸淳臨安志に出づ。

一會二靈山一猶未レ散。　一たび靈山に會して猶ほ未だ散せず、
重翻二貝葉一有二來由一。　重ねて貝葉を翻して來由あり。
是名二精進一纔開眼。　是に精進を名として纔に開眼すれば、
巖石無レ端亦點頭。　巖石端なく亦點頭す。

【題義】咸淳臨安志（元の潛說友の著）に「天竺寺の翻經臺は謝靈運、僧と此に會し、北本涅槃經を將て翻して南本となす」とある。樂天ここに遊んで此詩を作つたのであらう。

【詩意】ここは昔謝靈運と僧とが一たび相會して未だ嘗て散會せず、經文を更に翻譯しなほしたといふ來歷のある處である。因つて精進して開眼供養をした所が、佛像を彫刻した巖石が生あるものの如く、こちらを向いて點頭いた。

【字解】【一】靈山　杭州の靈隱山。此山に天竺寺あり。【二】貝葉　印度の貝多樹の葉、以て紙となすべし、用ひて以て經を寫す。ここは經文の意。【三】開眼　新造の佛像を神聖にする爲、僧侶の行ふ儀式。【四】點頭　うなづく。

寄二題上强山精舍寺一　出二王象之輿地紀勝一。今湖州石刻尚存。　王象之の輿地紀勝に出で、今湖州に石刻尚ほ存す。

慣二遊山水一住二南州一。　山水に慣れ遊んで南州に住し、
行盡二天台一及二虎丘一。　天台を行き盡して虎丘に及ぶ。
惟有二上强精舍寺一。　惟上强の精舍寺のみ有り、
最堪レ遊處未二曾遊一。　最も遊ぶに堪ふる處未だ曾て遊ばず。

【題義】湖州（今の浙江省吳興縣）の上强山の精舍寺に寄題（その場に臨まず遙に題すること）した詩である。

【詩意】自分は南國に住んでから山水の間に閑遊し、天台山から虎丘のあたりまで歷巡つた。ただ上强山の精舍寺だけは最も遊賞するに足る處でありながら、未だ嘗て遊んだことがない。

【字解】【一】南州　南方の州。【二】天台　浙江省天台縣に在る山の名。虎丘は江蘇省吳縣の西北七里に在る山の名。

句二　句二

學織(一)繚綾功未多。　繚綾を織るを學んで功未だ多からず、
亂投(二)機杼錯拋梭。　機杼を亂投して梭を錯拋す。
莫教(三)宮錦行家見。　宮錦行家をして見しむる莫れ、
把此文章(四)殺笑他。』　此文章を把つて他を殺笑せん。』
(五)如今不重文章事。　如今文章の事を重んぜず、
莫把文章(六)誇向人。』　文章を把つて人に誇る莫れ。』

盧氏雜話云。盧氏子合下第。步出都門。投逆旅。有一人續至。吟詩云云。盧愕然。憶是白居易詩。問之。曰。某世織綾錦。以薄藝投本行。皆云如今花樣與前不同。且東歸去。

【題義】不完全な二個の句を集錄したといふ意。

【詩意】綾錦を織ることを學んだが、まだ十分功を積まないので、杼や梭の投げ方さへ無鐵砲である。宮中の錦を織る本職に見せてくれるな。私の織つた模樣を見て冷笑ふであらうから。』今日はこんな模樣は珍重されない。こんな模樣を持つて來て人に誇るのをやめよ。

【字解】【一】繚綾　あやぎぬ。【二】機杼　ヲサ。横絲を緊める具。梭はヒ、横絲を運ぶ具。【三】宮錦　宮中で織る錦。行家は其道に精しき人の稱、くらうとといふが如し。【四】殺笑　笑殺の意であらう。【五】如今　今。今日。【六】誇向人　向は於の如し、誇於人に同じ。

白樂天詩後集　卷二十　補遺卷下

雜體聯句　凡三十首

七老會詩　七老會の詩

刑部尚書致仕太原白居易　年七十四幷序　刑部尚書致仕太原白居易　年七十四幷に序

胡・吉・劉・鄭・盧・張等六賢。皆多年壽。余亦次焉。偶於東都敝居履道坊。合成尚齒之會。七老相顧。既醉且歡。靜而思之。此會希有。因各賦七言六韻詩一章以紀之。或傳諸好事者。會昌五年三月二十四日。於白家履道宅同宴。宴罷賦詩。時祕書監狄兼謩。河南尹盧貞。以年未七十。雖與會而不及列。

【訓讀】胡・吉・劉・鄭・盧・張等六賢、皆年壽多く、余も亦次ぐ。偶〻東都の敝居履道坊に於て尚齒の會を合成す。七老相顧み、既に醉ひ且歡す。靜にして之を思ふ、此會有ること希なりと。因つて各〻七言六韻の詩一章を賦し以て之を紀し、諸を好事者に傳ふるあり。會昌五年三月二十四日、白家履道の宅に於て同じく宴す。宴罷んで詩を賦す。時に祕書監狄兼謩、河南尹盧貞、年未だ七十ならざる

を以て、會に與ると雖も列するに及ばず。

七人五百八十四。　七人五百八十四、
拖(一)紫紆朱垂二白鬚一。　紫を拖き朱を紆うて白鬚を垂る。
手裏無レ金莫二嗟歎一。　手裏金なけれども嗟歎するなく、
尊中有レ酒且歡娯。　尊中酒あり且歡娯す。
吟成二六韻(二)神還壯一。　吟じて六韻を成して神還た壯に、
飲到二三杯(三)氣尚麁(三)。　飲んで三杯に到りて氣尚ほ麁なり。
鬼(四)峨狂歌教(五)婢拍一。　鬼峨たる狂歌婢をして拍たしめ、
婆娑(五)醉舞遣二孫扶一。　婆娑たる醉舞孫をして扶けしむ。
天年高過二二(六)疏傅一。　天年高く二疏傅に過ぎ、
人數多二於四(七)皓圖一。　人數四皓の圖より多し。
除二却三山(八)五天竺一。　三山五天竺を除却し、
人間此會更應レ無。　人間此會更に應に無かるべし。

三仙山。五天竺國。多二老壽者一。

【字解】【一】紫、朱　貴人の服色なり。【二】六韻　十二句の詩。【三】麁　麤の俗字。粗と通ず。【四】鬼峨　高き貌。【五】婆娑　舞ふ貌。【六】二疏傅　疏廣は漢の宣帝の時太傅となり、兄の子受は少傅となる。位に在ること五歳、年老いたるを以て俱に辭して鄉に歸る。【七】四皓　商山の四皓。秦の亂を避けて商山に隱居せる四人の老人。【八】三山　三仙山。蓬萊・方丈・瀛洲なり。五天竺は古代印度の區畫。略して五天と稱す。【九】人間　世間。

【題義】七人の老人が集つて詩を作つた時の作である。

【詩意】七人の年齡を合せると五百八十四になる。白鬚を垂れてゐる。いづれも呑氣な連中だから、金はなくても嗟嘆もせず、酒を飲んでは歡んでゐる。互に六韻の詩を作りなどして精神も壯快であり、少しく酒がまはつて來ると段段氣も粗くなる。婢に拍子を取らせて高らかに歌ひ、孫に扶けられて醉舞する者もある。年の老いてゐることは漢の二疏にまさり、人數は七人だから商山の四皓よりも多い。三仙山五天竺を除いては、こんな老人供の會合は世間に類があるまい。

【餘論】參考の爲に胡杲以下六人の詩を此に揭げよう。

前懷州司馬安定胡杲　年八十九
閒居同會在二三春一。大抵愚年最出羣。霜鬢不レ嫌杯酒興。白頭仍愛玉爐熏。徘徊玩レ柳心猶健。
老大看レ花意却勤。鑿落滿斟判酩酊。香囊高挂任二氤氳一。搜神得レ句題二紅葉一。望景長吟對二白雲一。
今日交情何不レ替。齊年同事聖明君。

衞尉卿致仕馮翊吉皎　年八十八
休レ官罷レ任已閒居。林苑園亭與有レ餘。對レ酒最宜花藻發。邀レ歡不レ厭柳條初。低レ腰醉舞垂二緋袖一。
擊二筑謳一歌任二裼裾一。寧用二管絃一來合雜。自親二松竹一且清虛。飛レ觥酒到須二先酌一。賦詠詩成不レ住レ書。

借問商山賢四皓。不レ知此後更何如。

前磁州刺史廣平劉眞　年八十七

垂レ絲今日幸同レ筵。朱紫居レ身是大年。賞レ景尚知心未レ退。吟レ詩猶覺力完全。閑庭飮レ酒當二三月一。

在レ席揮レ毫象二七賢一。山茗煮時秋霧碧。玉杯斟處彩霞鮮。臨レ階花笑如二歌妓一。傍レ竹松聲當二管絃一。

雖レ未レ學レ窮二生死訣一。人間豈不二是神仙一。

前右龍武軍長史滎陽鄭據　年八十五

東洛幽閑日暮春。邀レ歡多是白頭賓。官班朱紫多相似。年紀高低次第勻。聯レ句每言松竹意。

停レ杯多說古今人。更無二外事來一心肺一。空有二清虛入一思神。醉舞兩回迎勸レ酒。狂歌一曲會娛レ身。

今朝何事偏情重。同作二明時列任臣一。

前侍御史內供奉范陽盧貞　年八十三

三春已盡洛陽宮。天氣初晴景象中。千朶嫩桃迎二曉日一。萬株垂柳逐二和風一。非レ論官位皆相似。

及レ至二年高亦共同一。對レ酒歌聲猶覺レ妙。玩レ花詩思豈能窮。先時共作二三朝貴一。今日猶逢七老翁。

但願酣醺常滿レ酌。烟霞萬里會應レ通。

前永州刺史清河張渾　年七十七

幽亭春盡共爲レ歡。印綬居レ身是大官。遁レ迹豈勞登二遠岫一。垂レ絲何必坐二谿磻一。詩聯六韻猶應レ易。

酒飮二三杯一未レ覺レ難。每況襟懷同宴會。共將二心事比一波瀾。風吹二野柳一垂レ縷帶。日照二庭花一落二綺紈一。

此席不レ煩二鋪錦帳一。斯筵堪レ作二畫圖看一。

九老圖詩　幷序　九老圖の詩　幷に序

會昌五年三月。胡・吉・劉・鄭・盧・張等六賢。於二東都敏居履道坊一。合二尙齒之會一。其年夏。又有二二老一。年貌絕倫。同歸二故鄕一。亦來二斯會一。續命書二姓名年齒一。寫二其形貌一。附於圖右。與二前七老一。題爲二九老圖一。仍以二一絕一贈レ之。

【訓讀】會昌五年三月、胡・吉・劉・鄭・盧・張等六賢、東都の敏居履道坊に於て尙齒の會を合す。其の年夏又二老あり、年貌絕倫、同じく故鄕に歸り、亦斯會に來る。續いで命じて姓名年齒を書し、其の形貌を寫し、圖右に附せしめ、前の七老と題して九老圖と爲す。仍つて一絕を以て之に贈る。

洛中遺老李元爽　年一百三十六
歸洛僧如滿　年九十五

雪作二鬢眉一雲作レ衣。
遼東華表暮雙歸。
當時一鶴猶希レ有。
何況今逢二兩令威一。

【題義】九人の老人の圖を寫さしめた時作つた詩である。

【字解】【一】遼東華表　搜神後記に、丁令威學二道於靈虛山一、後化レ鶴歸二遼東一、集二華表柱一云、有レ鳥有レ鳥丁令威、去レ家千年今始歸、城郭如レ故人民非、何不レ學レ仙塚纍纍とある。

【詩意】鬢も眉も雪の如く白く仙人のやうに雲の衣裳を著た二人の老人が相竝んで洛陽に歸つて來た。丁度丁令威が鶴に化して遼東に歸つて來たやうであるのに、二人まで丁令威が現れたのは殊に珍とするに足る。

一字至七字詩　白居易賦詩

一字より七字に至る詩を白居易詩を賦す

詩。
綺美。
瓌奇。
明月夜。
落花時。
能助歡笑。
亦傷別離。
調清金石怨。

詩。
綺美なり、
瓌奇なり。
明月の夜、
落花の時。
能く歡笑を助け、
亦別離を傷む。
調清くして金石怨み、

【字解】〔一〕都尉　漢の李陵は李廣の孫なり。武帝の時騎都尉に拜し、歩騎五千を率ゐ、匈奴と戰ひ、力竭きて匈奴に降る。蘇は蘇武なり。〔二〕司空　官名。

吟苦鬼神悲。
天下只應我愛。
世間唯有君知。
自從都尉別蘇句。
便到司空送白辭。

吟苦くして鬼神悲む。
天下只應に我を愛すべし、
世間唯君のみ知るあり。
都尉の蘇に別るる句より、
便ち司空の白を送る辭に到る。

【題義】唐詩紀事に「樂天東洛に分司たるとき、朝賢悉く興化（長安の里の名。後集卷十二の侍中晉公云云と題する詩の自注に見ゆ）の池亭に會して送別す。酒酣なるとき各一字より七字に至る詩を請ひ、題を以て韻となす」とある。

【詩意】詩といふものは綺美瓌奇なもので、明月の夜や落花の時に、歡笑を助けたり、別離を悲んだりする。その音調は金石の怨むが如く、吟ずるの苦きは鬼神の悲むが如くである。天下の人は我の詩を善くするを愛するが、眞に詩趣を認知する者は君のみである。漢の李陵の蘇武に別るる詩、司空の白居易を送る詩などは皆結構な詩である。

【餘論】同時に作つた樂天以外の人の作を次に揭げよう。

王起賦花

花。點綴分葩。露初曉。月未斜。一枝曲水。千樹山家。戲蝶未成夢。嬌鶯語更誇。既見東園成徑。何殊西子同車。漸覺風飄輕似雪。能令醉者亂如麻。

李坤賦月

月。光輝皎潔。耀乾坤。靜空濶。圓滿中秋。翫爭詩哲。玉兎鏑難穿。桂枝人共折。萬象照乃無詩。瓊臺豈遮君謁。抱琴對彈別鶴聲。不得知音聲不切。

令狐楚賦山

山。聳峻回環。滄海上。白雲間。商老深尋。謝公遠攀。古巖泉滴滴。幽谷鳥關關。樹島西連隴塞。猿聲南徹荊蠻。世間只向簪裾老。芳草空餘麋鹿閒。

元稹賦茶

茶。香葉。嫩芽。慕詩客。愛僧家。碾雕白玉。羅織紅紗。銚煎黃蘂色。盌轉麴塵花。夜後邀陪明月。晨前命對朝霞。洗盡古今人不倦。將知醉亂豈堪誇。

魏扶賦愁

愁。迴野。深秋。生枕上。起眉頭。閨閣危坐。風塵遠遊。巴猿啼不住。谷水咽還流。送客泊舟入浦。思鄉望月登樓。烟波早晩長羈旅。絃管終年樂五侯。

韋式郎中賦竹

竹。臨池似玉。裛露靜和烟。綠抱節寧改。貞心自束。渭曲種偏多。王家看不足。仙杖正驚龍化。美實當從鳳熟。唯愁吹作別離聲。回首鴛鷺舞陣速。

張籍司業賦花

花。落早。開賒。對酒客。興詩家。能廻遊騎。每駐行車。宛宛清風起。茸茸麗日斜。且願相留歡洽。惟愁虛棄光華。明年攀折知不遠。對此誰能更歎嗟。

范堯佐道士賦書

書。憑雁。寄魚。出王屋。入匡廬。文生益智。道著清虛。葛洪一萬卷。惠子五車餘。銀鉤屈曲索靖。題橋司馬相如。別後莫喚千里信。數封緘送到閒居。

宴興化池亭送白二十二東歸聯句

興化の池亭に宴し、白二十二の東歸を送る聯句

(一)東洛言歸去。(二)西園告別來。
東洛言に歸り去る、西園別を告げ來る。

(三)白頭青眼客。池上手中杯。
白頭青眼の客、池上手中の杯。

(四)離瑟殷勤奏。仙舟委曲回。
離瑟殷勤に奏し、仙舟委曲に回る。

(五)征輪今欲動。賓閣爲誰開。禹錫
征輪今動かんと欲す、賓閣誰が爲にか開く。

坐弄(六)琉璃水。行登綠褥苔。
坐して琉璃の水を弄し、行きて綠褥の苔に登る。

花低(七)妝照影。萍散酒吹醅。(八)居易
花低れて妝影を照し、萍散じて酒醅を吹く。

岸蔭新抽竹。亭香欲變梅。
隨遊多笑傲。(七)遇勝且徘徊。籍
澄澈連天鏡。(八)潺湲出地雷。
林塘難共賞。鞍馬莫相催。度
(九)信及魚還樂。(一〇)機忘鳥不猜。
晚晴槐起露。新暑石添苔。禹錫
擬作(一一)雲泥別。猶思(一二)頃刻陪。
歌停珠貫斷。飲罷(一三)玉峰頹。居易
雖有(一四)消搖志。其如(一五)磊落才。
會當重入用。此去肯悠哉。籍

岸蔭ひて新に竹を抽んで、亭香しくして梅を變ぜんと欲す。
遊に隨つて多く笑傲し、勝に遇うて且徘徊す。
澄澈天に連る鏡、潺湲たり地を出づる雷。
林塘共に賞し難し、鞍馬相催す莫れ。
信及んで魚還た樂み、機忘れて鳥猜はず。
晚晴槐露を起し、新暑石苔を添ふ。
雲泥の別を作さんと擬し、猶ほ頃刻の陪を思ふ。
歌停んで珠貫斷え、飲罷んで玉峰頹る。
消搖の志ありと雖も、磊落の才を其如せん。
會ず當に重ねて入り用ひらるべし、此に去るも肯て悠な
らんや。

【字解】【一】東洛　東の洛陽。【二】西園　興化池亭を指していふ。告別來の來は助辭と見るを可とす。【三】青眼　晉の阮籍能く青白眼をなす。禮俗の士を見れば白眼を以て之に對し、嵇康酒を齎し琴を抱いて來れば、大に悅んで乃ち青眼をなす。【四】委曲　徧くといふが如し。【五】征輪　旅立つ車。【六】醅　酒の未だ漉さざるもの。【七】遇勝　勝景に遇ふ。【八】潺湲　水の流るる聲。【九】信及　易經中孚卦彖傳に信及豚魚也とある。【一〇】機忘　機心のないこと。【一一】雲泥別　雲は天に在り、泥は地に在り、相隔たるをいふ。荀濟の詩に、雲泥已殊路とある。【一二】頃刻　暫時。【一三】玉峰頹　醉ひつぶれること。【一四】消搖　逍遙に同じ。優游する意。【一五】磊落才　偉才なり。

【題義】興化（前の詩を見よ）の池亭に宴し、白樂天（二十二は輩行）の東都分司となつて洛陽に歸るのを送つた聯句で、裴度・劉禹錫・張籍及び樂天の四人の作である。

【詩意】君（樂天を指す）が洛陽に去るので、この池亭で別筵を張ることになつた。白髮の氣心の合つた友達が集つて、池のほとりで酒を酌み、（度）殷勤に別れの曲を奏したり、舟で池上を乘りまはしたりして、君の旅立つ前に君の爲に今日の遊を催したのである。（禹錫）坐しては琉璃色の水を弄び、行いては褥のやうな苔を蹋めば、花が垂れて美人の姿を水にうつすが如く、萍が風に吹かれて酒の醅を吹くやうである。（居易）綠蔭深き岸には新しい竹が聳え立ち、梅も熟せんとして香氣を散じてゐる。友達の遊に隨つて笑傲し、勝景に遇うて徘徊すれば、（籍）池の水は鏡のやうに澄んで遠く天に連り、潺湲たる水の音は地を出づる雷のやうである。一たび君と別れては復た此景を倶に賞することは出來ないのだから、なるべく鞍馬をせきたてないで、ゆつくりするがよい。（度）信は魚にまで及んで人と共に樂み、機心がないから鳥も人に馴れて猜はない。日も晩れがたになつて槐に露が結び、新暑にさしかかつて石に苔が生えた。（禹錫）遠く諸君と相別れんとして猶ほ暫しの陪遊を貪れば、やがて歌が停んで貫珠が斷れたやうになり、皆杯を棄てて醉ひつぶれた。（居易）君は逍遙自適しようと思つても、經綸の偉才があるから、人が君を棄てては置かない。一時此地を去つても遠からず重ねて都に徵され、必ず大用せられるであらう。（籍）

首夏猶清和聯句

首夏猶ほ清和聯句(一)

記得謝家詩。清和卽此時。(二)居易

記し得たり謝家の詩、清和卽ち此時。

餘花數種在。密葉幾重垂。(三)度

餘花數種あり、密葉幾重か垂る。

芳謝人人惜。陰成處處宜。(四)禹錫

芳謝して人人惜み、陰成りて處處宜し。

水萍爭點綴。梁燕共追隨。行式

水萍爭つて點綴し、梁燕共に追隨す。

亂蝶憐疎蘂。殘鶯戀好枝。籍

亂蝶疎蘂を憐み、殘鶯好枝を戀ふ。

草香殊未歇。雲勢漸多奇。(五)易

草香殊に未だ歇まず、雲勢漸く多奇。

單服初寧體。新篁已出籬。(六)度

單服初めて體に寧く、新篁已に籬を出づ。

與春爲別近。覺日轉行遲。禹錫

春と別を爲すこと近く、日の轉行すること遲きを覺ゆ。

繞樹風光少。侵階苔蘚滋。行式

樹を繞つて風光少く、階を侵して苔蘚滋し。

唯思奉歡樂。長得在西池。(七)籍

唯思ふ歡樂を奉じ、長く西池に在るを得んことを。

【字解】【一】首夏猶清和　宋の謝靈運の遊二赤石一進帆レ海と題する詩の起句なり。【二】記得　記憶すること。謝家は謝靈運な指して言ふ。【三】芳謝　花の散ること。【四】陰成　綠陰が濃かになる。【五】雲勢漸多奇　陶淵明の四時の詩に、夏雲多二奇峰一とある。【六】單服　ひとへの著物。【七】新篁　新生の竹。【八】西池　裴度の興化の池亭をいふ。

【題義】初夏は猶ほ清和の好季節であるといふ意を詠じた聯句である。

【詩意】謝靈運の首夏猶ほ清和といふ詩は常に吾が記憶してゐる所であるが、その清和は丁度今の季節だ。(居易)花もまだ數種殘つて居り、葉が房房と密生してゐる。(度)花の散つたのは人の惜む所ではあるが、到處綠陰の濃かなのも亦捨て難い景色である。(禹錫)萍は爭つて水上に點綴し、燕は相伴つて梁上に棲つてゐる。(行式)蝶は亂れ飛んで疎な花を慕ひ、老鶯は好枝を繼うて啼いてゐる。(籍)若草の香もまだ歇まず、雲の姿も奇趣が增して來た。(居易)單の著物が身に輕く、新生の竹が籬に聳え出た。(度)まだ春が去つてから何程にもならない、日が永くて轉行が遲いやうに思はれる。(禹錫)樹林の風光は追追と趣が無くなるが、苔は礎階のあたりまで擴がつて來た。(行式)唯裴相公の爲に歡樂を奉じて、長く西池に居たいものだと思つてゐる。(籍)

薔薇花聯句

薔薇花聯句

似レ錦如二霞色一連レ春接レ夏開。禹錫

錦に似て霞色の如し、春に連り夏に接して開く。

波紅分レ影入。風好帶レ香來。度

波紅に影を分ちて入り、風好く香を帶びて來る。

得レ地依二東閣一當レ階奉二上台一。行式

地を得て東閣に依り、階に當つて上台に奉ず。

淺深皆有レ態。次第暗相催。禹錫

淺深皆態あり、次第暗に相催す。

滿ㇾ地愁二英落一。緣ㇾ堤惜二櫂回一。度　地に滿ちて英の落つるを愁へ、堤に緣つて櫂の回るを惜む。
芳濃濡二雨露一。明麗隔二塵埃一。行式　芳濃かにして雨露に濡ひ、明麗にして塵埃を隔つ。
似ㇾ著二胭脂染一。如ㇾ經二巧婦裁一。居易　胭脂の染を著たるに似、巧婦の裁を經たるが如し。
奈二花無一レ別計一。只有二酒殘杯一。籍　花の別計なきを奈せん、只酒の殘杯あり。

【字解】〔一〕東閣　漢の公孫弘丞相となり、東閣を開いて以て賢人を延く。因つて宰相褒度の閣に比す。〔二〕上台　星の名。宰相に比す。〔三〕胭脂　べに。顏料なり。〔四〕巧婦　手器用な女。〔五〕別計　別れ去らんとするかんがへ。

【題義】裴度の興化里の池亭で薔薇の花を觀て作つた聯句である。

【詩意】花の色は錦の如く霞の如く、春から夏に跨つて開く。(再錫)　影が水にうつつて紅の波が立ち、風が香氣を帶びてそよそよと吹いて來る。(度)　宰相の閣に地を占め、その賞翫に供してゐる。(行式)　色の薄いのも濃いのも皆趣が深く、次次に咲いて來る。(再錫)　折角の花が一面に落ちるのを愁へ、堤に緣つて櫂を回らして歸るのを惜む。(度)　花の色が濃かで雨露に濡ひ、美しくて塵一つ附いてゐない。(行式)　胭脂染の手器用な女の仕立てた著物を著てゐるやうに見える。(居易)　ただ酒は杯に殘つてゐるが、いくら見てゐても花に別れ去る氣にはならない。(籍)

西池落泉聯句

西池の落泉聯句

東閣聽二泉落一。能令二夜興多一。行式　東閣泉の落つるを聽けば、能く夜興をして多からしむ。
散時猶帶ㇾ沫。淙處却跳ㇾ波。度　散ずる時猶ほ沫を帶び、淙るる處却つて波を跳らす。
偏洗二磷磷石一。還驚二泛泛鵝一。籍　偏に磷磷たる石を洗ひ、還た泛泛たる鵝を驚かす。
色青塵不ㇾ染。光白月相和。居易　色青くして塵染まず、光白くして月相和す。
噴ㇾ雪縈二松竹一。攢ㇾ珠濺二芰荷一。禹錫　雪を噴いて松竹に縈ひ、珠を攢めて芰荷に濺ぐ。
對ㇾ吟時合ㇾ響。觸ㇾ樹更搖ㇾ柯。籍　吟に對して時に響を合せ、樹に觸れて更に柯を搖かす。
照ㇾ圃紅分ㇾ藥。侵ㇾ階綠浸ㇾ莎。居易　圃を照して紅、藥を分ち、階を侵して綠、莎を浸す。
日斜車馬散。餘韻鳴珂。禹錫　日斜にして車馬散じ、餘韻鳴珂を逐ふ。

【字解】〔一〕東閣　前の詩に見ゆ。〔二〕磷磷　玉石の色澤なり。司馬相如の賦に磷磷爛爛とある。〔三〕泛泛　水に浮ぶ貌。〔四〕芰荷　菱や蓮の葉。〔五〕藥　芍藥なり。〔六〕莎　草の名。〔七〕鳴珂　珂は馬勒なり。古人多く珂を以て馬勒を飾る。

【題義】裴度の興化の池亭（前に見ゆ）に遊び落泉を觀て作つた聯句である。

【詩意】宰相裴公の池亭で泉の落つる聲を聽けば、特に夜興を深からしめる。(行式)　水の散ずる時には猶ほ飛沫を帶び、淙然と流れ注ぐ處には却つて波を立てる。(度)　磷磷たる池中の石を洗ひ、泛泛と浮遊する鵝を驚かす。(籍)　水の色が青くて塵をも止めず、月の光が白く相和してゐる。(居易)　雪のやう

に噴き上つて松や竹にまとひ、菱や蓮の葉に濺いで珠のやうにころがる。(禹錫)　詩を吟ずれば相對して調子を合せ、樹に觸れて更に柯を搖かす。(籍)　花園を照しては芍藥の紅を分ち、階を侵しては莎草の綠を浸してゐる。(居易)　日が暮れて一同車馬を驅つて退散すれば、泉の響が猶ほ馬勒の音を逐つて來る。(禹錫)

杏園聯句

杏園聯句

(一)杏園千畝欲ㇾ隨ㇾ風。　杏園千畝風に隨はんと欲し、
一醉同人此暫同。(二)　一醉同人此に暫く同じうす。
醉上司空一。
老態忽忘絲(三)鬢裏。　老態忽ち忘る絲鬢の裏、
衰顏宜ㇾ解酒杯中。　衰顏宜しく解くべし酒杯の中。
絳上二白二。
曲(四)江日暮殘紅盡。　曲江日暮れて殘紅盡き、
翰(五)苑年深舊事空。　翰苑年深くして舊事空し。
居易上二主客一。

【字解】【一】杏園　長安の西に在り、芙蓉園と皆秦の宜春下苑の地たり。唐の新進士多く此に遊宴す。　隨ㇾ風は列子に、心凝神釋、隨ㇾ風東西とある。【二】同人　事を同うする者をいふ。【三】絲鬢　白毛の鬢。【四】曲江　漢の武帝、秦の宜春苑の故址に因りて開鑿せるもの。南に芙蓉苑あり、西を杏園となし、北を樂遊原となす。秀士毎年登科すれば、宴を此に賜ふ。【五】翰苑　翰林なり。内延供奉の官。【六】故人　舊

二十四年流落者。　二十四年流落する者、
故(六)人相引到二花叢一。禹錫　故人相引いて花叢に到る。

【題義】杏園に遊んで作つた聯句である。

【詩意】ひろびろとした杏園に遊び、同人相會して暫く一醉した。(醉うて司空に上る。)　互に鬢の白くなつたのも忘れ、酒を飲んで衰顏を解いた。(李絳が白樂天に上る。二十二は樂天の排行。)　曲江のあたりは日が暮れ花も盡きて、昔翰林院に奉職した時の事は夢のやうに消え去つた。(樂天が主客郎中劉禹錫に上る。)　ゐた者が、此に相攜へて杏園に遊んだ。(禹錫)

花下醉中聯句

花下醉中聯句

共醉風光地。花飛落二酒杯一。　共に醉ふ風光の地、花飛んで酒杯に落つ。
絳送二一十八一。
殘春猶可ㇾ賞。晚景莫二相催一。　殘春猶は賞すべし、晚景相催す莫れ。
禹錫送二白侍郎一。
酒幸年年有。花應二歲歲開一。　酒幸に年年あり、花應に歲歲開くべし。
居易送二兵部相公一。

且當二金韻擲一。莫レ遣二玉山頹一。
絳送二庾閣長一。　　かつまさきんゐんなげうつべし、ぎよくざんをしてくづれしむる莫れ。

高會彌堪レ惜。良時不レ易レ陪。
承宣送二主客一。　　かうくわいいよいよをしむに堪へたり、りやうじはいし易からず。

誰能拉レ花住。爭(一)換得二春回一。
禹錫送二吏部一。　　たれよくはなを拉して住め、あらそひ(換)はるかへるを得ん。

我輩尋常有。佳(二)人早晚來。
嗣復送二兵部一。　　わがはいじんじやうあり、じんさうばんきたらん。

寄レ言三相(三)府。欲レ散且徘徊。
居易時戶部相公同會。　　げんをよす三相府、さんせんと欲して且く徘徊す。

【字解】【一】爭換　爭喚の誤か。【二】佳人　佳士なり。早晚は、いつといふ意。【三】三相府　三人の宰相。

【題義】花下に醉うて作つた聯句である。

【詩意】共に風光の好い此地に遊んで酒を飲んでゐると、花が飛んで杯の中に落ちる。（李絳が此二句を作つて劉禹錫に引繼いだ。二十八は禹錫の輩行。）今は殘春ではあるが猶は賞するに足りる。願はくは日が早く暮れないやうにしてほしい。（劉禹錫が此二句を作つて刑部侍郎白樂天に引繼いだ。）酒は幸に年年ある、花も歲歲開くであらう。（樂天が李絳に送つたので兵部相公は李絳。）且金石の韻を發する好い詩を作るがよい。酒に醉ひつぶれてはならない。（李絳が庾承宣に送る。）かかる結構な集會は誠に惜むべきであつて、またと再び陪遊することは出來ぬであらう。（庾承宣が主客郎中劉禹錫に送る。）誰か能く花を引留め、逝く春をもとに返すであらう。（劉禹錫が吏部尚書楊嗣復に送る。）我我のやうな者はいつでも有るが、相公の如き佳士は、いつまた來られるであらうか。（楊嗣復が兵部相公に送つた。）三相公に言を寄せ、散會しようとして暫く徘徊した。（樂天、時に戶部相公も同じく會した。）

喜レ遇二劉二十八一偶書二兩韻聯句一

劉二十八に遇ふを喜び、偶〻兩韻聯句を書す

病來佳興少。老去舊遊稀。
びやうらいかきようすくなく、らうきよきういまれなり。

笑語縱橫作。杯觴絡繹(二)飛。
せうごじうわうおこり、はいしやうらくえきとして飛ぶ。

清談如二氷玉一。逸(三)韻貫二珠璣一。
せいだんひようぎよくのごとく、いつゐんしゆきをつらぬく。

高位當二金(四)鉉一。虛懷似二布衣一。
かうゐきんげんにあたり、きよくわいふいにたり。

已榮レ狂取レ樂。仍任レ醉忘レ機。
すでにきやうをえいとしてがくをとり、なほよひにまかせてきをわする。

捨レ眷將二何適一。留歡便是歸。
けんをすてて將にいづくにゆくにか適かんとする、とどまりくわんしてすなはちここに歸らん。

風儀常欲レ附。蛟(五)力自知レ微。
ふうぎつねにつかんと欲し、かうりよくみづからびなるをしる。

願假二尊罍末一膺門自レ此依。紳　願はくは尊罍の末を假り、膺門此より依らん。

【字解】〔一〕舊遊　舊友に同じ。〔二〕絡繹　ひきつづく貌。〔三〕逸韻　すぐれた詩。〔四〕金鉉　易に鼎黄耳金鉉とあり、宰相に喩ふ。〔五〕蛟力　蛟龍の力。〔六〕膺門　李膺の門。李膺は後漢の人。士容接を被る者、名づけて登龍門となす。

【題義】劉禹錫（二十八は輩行）に遇うたことを喜び、偶〻二韻四句づつの聯句を作つたのである。

【詩意】病を獲てからは兎角に感興が乏しく、老いては舊友も少くなつたが、今久し振で相會し、笑語を肆にし、縱横無盡に觴を飛ばす。（裴度）幽談の清きことは氷玉の如く、詩韻の高きことは貫珠の如く、位は台鼎の高きにゐても、心は虚淡にして布衣の如くである。（劉禹錫）已に醉狂して樂み、又機巧の心を失つてしまつた。眷顧を辱うする人を捨てて何處に往かうか、留まりて十分に愉快を盡し、然る後に退散しようではないか。（居易）　自分は常に裴相公の風儀を仰ぎ、之に附かんと欲する者であるが、自ら省みて微力爲すなきを知つてゐる。ただ願はくは杯酒の末に託して其門に依附し、後日龍門に登る資となしたいものだ。（李紳）

劉二十八自レ汝赴二左馮一塗經二洛中一相見聯句

劉二十八、汝より左馮に赴き、塗洛中を經、相見て聯句す

不歸二丹掖一去。銅竹漫云云。　丹掖に歸り去らず、銅竹漫に云云す。

唯喜因レ過レ我。須レ知未レ賀レ君。度　唯喜ぶは我を過ぎるに因る、須らく知るべし未だ君を賀せざるを。

詩聞二安石一詠。香見二令公一熏。　詩は聞く安石の詠、香は見る令公の熏。

欲レ首二函關一路。來披二綠嶺一雲。居　欲首函關の路に首はんと欲し、來りて綠嶺の雲を披く。

貂蟬公獨步。鴛鷺我同羣。　貂蟬公獨步、鴛鷺我同羣。

插レ羽先飛レ酒。交レ鋒便戰レ文。紳　羽を插んで先づ酒を飛ばし、鋒を交へて便ち文を戰はす。

鎭レ嵩知二表一レ德。定レ鼎爲レ銘レ勳。　嵩を鎭するは德を表するを知る、鼎を定むるは勳を銘するを爲なり。

顧レ鄙容二商一洛。徵レ歡候二汝一墳。禹錫　鄙を顧みて商洛に容れ、歡を徵して汝墳に候つ。

頻年多二謔一浪。此夕任二喧一紛。　頻年謔浪多く、此夕喧紛に任す。

故態猶應レ在。行期未レ要レ聞。度　故態猶ほ應に在るべし、行期未だ聞くを要せず。

遊レ藩榮已久。捧レ袂惜レ將レ分。　藩に遊んで榮已に久し、袂を捧げて將に分れんとするを惜む。

詎厭杯行疾。唯愁日向レ曛。居易　詎ぞ厭はん杯行の疾きを、唯愁ふ日の曛に向ふを。

窮陰初莽蒼。離思漸氤氳。　窮陰初めて莽蒼、離思漸く氤氳。

殘雪午橋岬。斜陽伊水濱。紳　殘雪午橋の岬、斜陽伊水の濱。

上レ謨尊二右掖一。全略靜二東軍一。　謨を上りて右掖を尊くし、略を全うして東軍を靜にす。

萬頃徒稱レ量。滄溟詎有レ垠。禹錫　萬頃徒に稱量に稱、滄溟詎ぞ垠あらん。

【字解】【一】丹掖　宮闕なり。【二】銅竹　銅虎符、竹使符なり。刺史の信符。【三】安石　晉の謝安、字は安石。裴度に比す。【四】令公　中書令をいふ。裴度は太和九年十月位を中書令に進められた。【五】函關　函谷關なり。【六】緜嶺　洛陽の附近に在る山の名。相傳ふ王子晉七月七日白鶴に乘りて山巓に駐り、手を擧げ時人に謝して去ると。【七】貂蟬　侍中、常侍等の冠の飾。【八】鶺鴒　鶺は鴒と通ず。朝官の列位をいふ。【九】鎭ㇾ嵩　裴度の東都留守となりしことをいふ。嵩山は洛陽の附近に在り。【一〇】商洛　商丘洛水。洛陽なり。【一一】汝墳　汝水の堤。洛陽の附近。【一二】謖浪　戯謖放蕩なり。【一三】午橋　洛陽の橋名。裴度の第の在る處。【一四】伊水　洛陽附近の川の名。【一五】右掖　中書省をいふ。【一六】稱量　測量する。【一七】滄溟　大海。裴度に喩ふ。

【題義】太和九年、劉禹錫（二十八は輩行）が汝州刺史から同州（漢の左馮翊の地）刺史に轉任するについて、洛陽を通過したので、舊友相會して此聯句を作つたのである。

【詩意】劉君は宮闕に歸ることも出來ずに、今以て地方官としてぐづぐづしてゐるのは、誠に惜むべきことである。今余の喜ぶのは久し振で君に遇うたのを喜ぶので、君の轉任を賀する意味ではない。（裴度）劉君は晉の謝安にも比すべき裴公の詩を聞き、その手づから香を焚くのを見、函谷關を指して行く途中、暫く此洛陽に馬を駐めたのは、光榮と爲すに足るのであらう。（居易）裴公は官位の高いこと現代に比ぶべき者なく、我我は十把ひとからげの連中である。かく貴賤等を異にするにも拘らず、羽觴を飛ばして俱に醉ひ、鋒を交へて文を戰はすのは、以て公の德の洪大なことがわかる。（李紳）裴公が東都留守たるは天子が其德を表することを知るからで、鼎を定むるは其勳功を刻鏤せんが爲である。かかる尊い御方が鄙賤の身を待して、汝水の墳に歡迎して下さるのは、身に餘る光榮である。（劉禹錫）近來は無禮講で戯謔を肆にしてゐるから、今晩も喧騷に任せるとしよう。遠慮なく昔ながらの狂態を演ずるがよい。出立の期日などは聞くには及ばない。（裴度）刺史たる光榮を荷つて各地に轉徙する劉君と將に袂を分たんとするは惜むべきである。杯の巡るのの疾いのは厭はないが、日の暮れんとするのは愁ふべきである。（居易）今や年の暮であたりの景色も陰氣くさく、離別の情もむらむらと起つて來た。午橋の岸には殘の雪が見え、伊水の濱には夕日が傾いてゐる。（李紳）裴公は謀略を闕下に上つて中書を尊くし東軍を鎭めた。實に萬頃の大海の如き御方で、廣大無邊測り知ることは出來ない。（劉禹錫）

予自ㇾ到ニ洛中一與ニ樂天一爲ニ文酒之會一時時構ㇾ詠。樂不ㇾ可ㇾ支。則慨然共憶ニ夢得一。而夢得亦分司至止。歡愜可ㇾ知。因爲ニ聯句一

予洛中に到りしより樂天と文酒の會を爲し、時時詠を構ふ。樂支ふべからず。則ち慨然として共に夢得を憶ふ。而るに夢得も亦分司として至り止まる。歡愜知るべし。因つて聯句を爲す

（一）成周文酒會。吾友勝ニ鄒枚一。　成周文酒の會、吾が友鄒枚に勝る。
唯憶劉夫子。而今又到來。　唯憶ふ劉夫子、而今又到來す。
欲ㇾ迎先倒ㇾ屣。一座便傾ㇾ杯。　迎へんと欲して先づ屣を倒にし、一座便ち杯を傾く。

飲許(四)伯倫石。詩推(五)公幹才。居易
　並以二本事一。
飲は伯倫の石を許し、詩は公幹の才を推す。

久曾聆(六)郢唱。重喜(七)上二燕臺一。
久しく曾て郢唱を聆く、重ねて燕臺に上るを喜ぶ。

晝話牆陰轉。宵歡斗柄廻。禹錫
晝話牆陰轉じ、宵歡斗柄廻る。

新聲還共聽。故態復相咍。
新聲還た共に聽き、故態復た相咍ふ。

遇レ物皆先賞。從レ花半未レ開。度
物に遇へば皆先づ賞し、花に從へば半未だ開かず。

起時烏(九)帽側。散處玉(一〇)山頹。
起つ時烏帽側ち、散ずる處玉山頹る。

墨(一一)客喧二東閣一。文(一二)星犯二上台一。居易
墨客東閣に喧しく、文星上台を犯す。

詠吟君稱(一三)首。疎放我爲レ魁。
詠吟君稱首、疎放我魁となる。

憶(一四)戴何勞レ訪。時夢得分司而來。
憶ふ戴何ぞ訪ふを勞せん、

留(一五)髡不レ用レ猜。夢得宴席上。老夫暫起。樂天寄坐不レ動レ足。
髡を留めて猜ふを用ひず。

奉レ觴承二麴(一六)蘗一。落レ筆捧二瓊(一七)瑰一。
觴を奉じて麴蘗を承め、筆を落して瓊瑰を捧ぐ。

醉(一八)弁無レ妨レ側。詞鋒不レ可レ摧。居易
醉弁側つを妨ぐる無し、詞鋒摧くべからず。

此兩韻美二令公一也。

水軒看二翡(一九)翠一。石徑蹑二莓(二〇)苔一。
水軒翡翠を看、石徑莓苔を蹑む。

童子能騎レ竹。佳人解詠レ梅。禹錫
童子能く竹に騎り、佳人解く梅を詠ず。

陪二遊南宅之燕一。
洛中三可矣。鄴(二一)下七悠哉。
洛中三可矣、鄴下七悠なる哉。

自向二風光急一。不レ須二絃管催一。度
自ら風光の急なるに向ふ、絃管の催すを須ひず。

樂觀二魚踴躍一。閒愛二鶴徘徊一。
樂んで魚の踴躍するを觀、閒に鶴の徘徊するを愛す。

烟柳青凝レ黛。波萍綠撥レ醅。居易
烟柳、青、黛を凝らし、波萍、綠、醅を撥す。

春榆初改レ火。律(二四)管又飛レ灰。
春榆初めて火を改め、律管又灰を飛ばす。

紅(二五)藥多遲發。碧松宜二亂栽一。禹錫
紅藥多く遲く發き、碧松、亂栽に宜し。

馬嘶馳(二六)陌上。鷁(二七)泛鳳城隈。
馬は嘶く馳陌の上、鷁は泛ぶ鳳城の隈。

色色時堪レ借。岑(二八)岑病莫レ推。度
色色時借るに堪へたり、岑岑病推す莫し。

涸流尋軋(二九)軋。餘刃轉恢(三〇)恢。
涸流尋いで軋軋、餘刃轉た恢恢。

從レ此知二心伏一。無レ因二敢自媒一。禹錫
此より心伏するを知る、敢て自ら媒するに因るなし。

室隨二親客入一。席許二舊寮陪一。
室は親客の入るに隨ひ、席は舊寮の陪するを許す。

逸興嵇(三一)將阮。交情陳(三二)與雷。居易　逸興嵇と阮と、交情陳と雷と。

此二句屬夢得也。

洪爐(三三)思哲匠。大厦要羣材。　洪爐哲匠を思ひ、大厦羣材を要す。

他日登龍路(三四)。應知免曝顋。禹錫　他日登龍の路、應に知るべし顋を曝すを免るるを。

【字解】【一】成周　洛陽をいふ。【二】鄒枚　鄒陽・枚乘。竝に漢代の文士で梁の孝王の眷顧を被つた。【三】倒屣　客を迎ふるに急なるをいふ。三國志王粲傳に、蔡邕才學顯著、常賓客盈坐、聞粲在門、倒屣迎之とある。【四】伯倫　晉の劉伶、字は伯倫、縱酒放達なり、嘗て酒德頌を著はす。石は量の名。【五】公幹　三國魏の劉楨、字は公幹。王粲等と建安七子と稱せらる。【六】郢唱　すぐれた詩。宋玉の文に、客有歌於郢中者、其始曰下里巴人、國中屬而和者數千人、其爲陽春白雪、國中屬而和者不過數十人云云とある。【七】燕臺　宴臺なり。燕の昭王の黃金臺と見ても可なり。【八】斗柄　北斗七星の五より七に至る三星。【九】烏帽　隱者の服。【一〇】玉山頹　醉倒する。【一一】墨客　詩人。東閣は前の薔薇花聯句に見ゆ。【一二】文星　文士に喩ふ。上台は星の名。宰相裴度に喩ふ。【一三】稱首　第一等。【一四】憶戴　晉の王徽之、字は子猷、月に乘じて戴逵を訪ひ、門に及んで返る。人其故を問ふ。曰く興に乘じて來り、興盡きて反る。何ぞ必ずしも戴を見んと。戴逵を以て劉禹錫自ら比す。【一五】留髡　史記滑稽列傳に、日暮酒闌、合樽促坐、男女同席、履舄交錯、杯盤狼藉、堂上燭滅、主人留淳于髡而送客、羅襦襟解、微聞香澤云云とある。淳于髡を以て白樂天に比す。【一六】麴蘖　酒の異名。【一七】瓊瑰　美玉。美詩に喩ふ。【一八】醉弁　醉うた武冠。裴度の冠なり。【一九】翡翠　水鳥の名。羽毛極めて美なり。【二〇】莓苔　苔。【二一】鄴下　三國魏の武帝鄴に都す。孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・應瑒・劉楨、之を鄴下七子といふ。詩文を以て名あり。【二二】撥醅　酒の熟すること。【二三】春楡初改火　唐輦下歲時記に、清明日、取楡柳之火、以賜近臣也とある。清明は陽曆四月初旬である。【二四】律管又飛灰　律管中葭灰飛動するなり。古は此を以て節氣を候ふ。【二五】紅藥　紅色の芍藥。【二六】駞陌　洛陽の銅駝街。【二七】鷁　水鳥の名。鳳城は禁城。【二八】芽芽　未詳。【二九】軋軋　棹の聲。【三〇】恢恢　餘裕ある貌。莊子養生主篇に恢恢乎其於遊刃、必有餘地矣とある。【三一】嵇將阮　嵇康と阮籍。【三二】陳與雷　後漢の雷義茂才に擧げられ、陳重に讓る。鄉里之が語をなして曰く、膠漆自謂堅、不如雷與陳と。【三三】洪爐　大爐なり。哲匠はすぐれた鍛冶。莊子大宗師篇に、今以天地爲大爐、以造化爲大冶云云とある。【三四】登龍路　龍門は黃河の上流にして水深險なり。相傳ふ大魚之に登れば、化して龍となると。故に士人身を顯榮に致すを登龍門といふ。

【題義】予（裴度）は太和八年に東都留守になつて洛陽に來てから白樂天と文酒の會をなし、時時吟詠して樂んでは、劉禹錫（字は夢得）の居ないのを惜んだ。所が禹錫も分司東都となつて洛陽に來た。因つて歡びのあまり此聯句を作つたといふのである。

【詩意】洛陽の文酒の會に於ける吾が友は鄒陽や枚乘に勝る名手である。唯劉夢得のゐないのが遺憾であつたが、夢得も今度洛陽に來たのは喜ばしい。（裴度）因つて屣を倒にして急ぎ迎へ、一座して杯を傾けた。酒量は劉伶に匹敵し、詩才は劉楨に比肩するに足る。（居易）嘗て久しくすぐれた詩を聽いてゐたが、今は重ねて宴席に列することを得て誠に嬉しい。晝は話込んで覺えず時を移し、夜は歡興に耽つて夜の闌なるに至る。（禹錫）新作の詩をば共に聽き、昔ながらの狂態を笑ひ、物に遇うて先づ賞し、花を尋ぬれば半ばまだ開かない。（度）起つて散會する時は烏帽が傾いたり、醉ひつぶれたりするほど、東閣に喧騷を極め、相公の尊嚴を瀆したりする。（居易）詠吟の點では君が第一であるが、疎放の點では僕が第一である。戴を憶へば往き訪ふを待たずに先方からこちらへ來た。淳于髡を後へ殘して置いても妓女などに惡戲をする疑はない。（夢得）美酒を勸めたり佳詩を捧げたりすれば、醉うて弁の傾くを妨げず、詞鋒當るべからざる勢がある。（居易）水亭に憩ひては翡翠を看、

石徑を歷ては青苔を踐み、童子の能く竹馬に乘り、佳人の梅花を詠じたりするのを見た。(禹錫)　我等三人現に洛陽の文壇を支配し、鄴下の七子は遠く史上の人になつてしまつた。風光の移るのは急速なものであるから、管絃を奏してせき立てるには及ばない。(度)　魚の躍るのを觀て樂み、鶴の徘徊するのを愛翫すれば、柳の枝は黛を凝らしたやうに青く、波上の萍は濁酒のやうに綠を點じてゐる。(居易)　やがて清明の時節になり、芍藥の花もまだ開かず、碧松の亂雜に栽ゑてあるのも面白い。(禹錫)　春駒を銅駝街上に驅り、鷁首の船を禁城の邊に泛べ、病を厭はず時を偸んで遊賞する。(度)　我我は詩思が涸れてしまつても、相公は尙ほ餘裕綽綽としてゐる。敢て自ら取入るやうなことをせずとも、今日以後は必ず相公の知遇を被るであらう。(禹錫)　親客の入るに隨つて室に入り、舊僚と倶に席に陪し、酒興の深いことは嵇康と阮籍との如く、交情の密なることは陳重と雷義とのやうだ。(居易)　天下を治めるには賢哲を要し、大事を成すには羣材を要する。後日我我は相公のお蔭で顯を曝すやうなことがなく、首尾よく龍門に登り得るであらう。(禹錫)

秋霖卽事聯句三十韻　秋霖卽事聯句三十韻

(一)蕭索窮秋月。(二)蒼茫苦雨天。　蕭索たる窮秋の月、蒼茫たる苦雨の天。

(三)泄雲生棟上。(四)行潦入庭前。居易　泄雲棟上に生じ、行潦庭前に入る。

送上僕射。

苔色侵(五)三徑。波聲想(六)五絃。　苔色三徑を侵し、波聲五絃を想ふ。

井蛙爭入戶。(七)轍鮒亂歸泉。起　井蛙爭つて戶に入り、轍駙亂れて泉に歸る。

送上中丞太監。

高響愁晨坐。空階警夜眠。　高響晨坐を愁へ、空階夜眠を警む。

鶴鳴猶未已。蟻穴亦頻遷。禹錫　鶴鳴いて猶ほ未だ已まず、蟻穴亦頻に遷る。

送上少傅侍郎。

散漫疎還密。空濛斷復連。　散漫疎還た密、空濛斷えて復た連る。

竹霑青玉潤。(八)荷滴白珠圓。居易　竹霑ひて青玉潤ひ、荷滴りて白珠圓なり。

地濕灰(九)蛾滅。池添水(一〇)馬憐。　地濕ひて灰蛾滅し、池添へて水馬憐む。

有苗霑(一一)霢霂。無月弄(一二)潺湲。起　苗の霢霂に霑ふあり、月の潺湲を弄するなし。

籬菊潛開秀。園蔬已罷鮮。　籬菊潛に秀を開き、園蔬已に鮮を罷む。

斷行隨鴈翅。孤嘯聳鳶肩。禹錫　斷行鴈翅に隨ひ、孤嘯鳶肩を聳かす。

橋柱黏黃菌。(一三)牆衣點綠錢。　橋柱黃菌を黏し、牆衣綠錢を點ず。

草荒行藥路。沙泛釣魚船。居易
長者車猶阻。高人榻且懸。
此思劉白之來也。
金烏何日見。玉爵幾時傳。起
以答懸懸之召。
近井桐先落。當檐石欲穿。
趨風誠有戀。披霧邈無緣。禹錫
廩米陳生饌。庖薪濕起烟。
鳴雞潛報曉。急景暗彫年。居易
蓋灑高松上。絲繁細柳邊。
拂叢時起蝶。隨葉乍驚蟬。起
巾角皆爭墊。裙裾別似湔。
人多蒙翠被。馬盡著連乾。禹錫
好客無來者。貧家但悄然。

草は荒る行藥の路、沙は泛ぶ釣魚の船。
長者車猶ほ阻てられ、高人榻且懸く。
金烏何の日か見ん、玉爵幾時か傳へん。
井に近く桐先づ落ち、檐に當つて石穿たんと欲す。
趨風誠に戀ふあり、披霧邈として緣なし。
廩米陳くして饌を生じ、庖薪濕ひて烟を起す。
鳴雞潛に曉を報じ、急景暗に年を彫す。
蓋は灑ぐ高松の上、絲は繁し細柳の邊。
叢を拂つて時に蝶を起し、葉に隨つて乍ち蟬を驚かす。
巾角皆爭つて墊し、裙裾別に湔ふに似たり。
人多く翠被を蒙り、馬盡く連乾を著く。
好客來る者なく、貧家但悄然。

濕泥印鶴迹。漏壁蝸涎絡。
蚊聚雷侵室。鷗翻浪滿川。
上樓愁霼霼。繞舍厭濺濺。起
律候今秋矣。歡娛久曠焉。
但令高興在。晴後奉周旋。禹錫

濕泥鶴迹を印し、漏壁蝸涎を絡ふ。
蚊聚りて、雷、室を侵し、鷗翻りて浪川に滿つ。
樓に上りて霼霼たるを愁へ、舍を繞りて濺濺たるを厭ふ。
律候今秋なり、歡娛久しく曠し。
但高興をして在らしめば、晴後周旋を奉ぜん。

【字解】【一】蕭索　淋しき貌。窮秋は秋の末。【二】蒼茫　涯りなき貌。樂天の句に、寒銷春蒼茫とある。苦雨は左傳に春無二淒風一、秋無二苦雨一。雨の人の患をなすもの。【三】泄雲　散雲なり。【四】行潦　路上の流水。【五】三徑　昔蔣詡幽居して三徑を開く。【六】五絃　琴なり。【七】轍鮒　車の迹の中に窮困する鮒。莊子に車轍中有二鮒魚一焉とある。【八】荷　蓮の葉。【九】灰蛾　蟲の名。灰蛈蛾。【一〇】水馬　水黽なり。蟲の名。常に水面に羣集し小蟲を捕食す。【一一】霢霂　小雨なり。【一二】潺湲　水の流るる聲。【一三】牆衣　苔なり。【一四】行藥　鮑昭に行藥至二城東橋一詩あり。文選五臣注に、昭因レ疾服レ藥、行而宣二導之一とある。【一五】長者　顯貴者の稱。史記に門外多二長者車轍一とある。【一六】高人　高士なり。榻且懸は後漢書徐穉傳に、陳蕃爲二太守一、不レ接二賓客一、唯穉來、特設二一榻一、去則懸レ之とある。【一七】金烏　日なり。【一八】玉爵　酒杯なり。【一九】急景　光陰の迅速なるをいふ。彫レ年の彫は凋に同じ。【二〇】蓋　松の枝をいふ。車蓋を張りたる如くなる故。【二一】巾角　頭巾の稜角。墊は低下する。漢の郭泰嘗て雨に遇ふ。巾の一角墊す。時人乃ち故に巾の一角を折りて之に倣ひしといふ。【二二】翠被　雨合羽。左傳昭公十二年に見ゆ。【二三】連乾　馬の飾なり。晉書王濟傳に、嘗乘二一馬一、著二連乾郭泥一とある。【二四】霼霼　雲の覆ふ貌。【二五】濺濺　水の疾く流るる貌。【二六】律候　時節。

【題義】秋の長雨の實景を敍した聯句、三十韻六十句。

【詩意】淋しき秋の末に濛濛と長雨が降りそそぎ、雲が散じて棟の上を飛び、路上の流水が庭まではひり込む。（居易が此四句を作つて僕射王起に送つた。）苔が庭の徑までひろがり、水の聲が琴を彈くやうである。蛙も爭つて戸口に飛び込み、轍の鮒も水に歸ることが出來た。（王起が此四句を作つて中丞太監に送つた。）雨の音は晨坐を愁へしめ、空階に降り注いでは夜眠を驚かす。鶴は鳴いて已まず、蟻の穴も屢〻位置を變へた。（禹錫が少傅侍郎居易に送つた。）雨の飛散することが疎になつたり密になつたりし、雲霧が斷れたり續いたりする。竹は青玉の潤ふが如く、蓮の葉は白珠を滴らしてゐる。（居易）地が濕つた爲に灰蛾も影を潛め、池の水が增したので水馬は大喜である。苗は小雨に霑つて勢がよいが、月の潺湲たる流にうつる風情はない。（起）籬の菊は潛に花を開いたが、畠の野菜は枯れ果てた。羣を失つた鴈のやうに行遊を斷ち、獨り肩を聳かして詩を吟じてゐる。（禹錫）橋の柱には黃い菌が生え、牆の苔は錢をはりつけたやうだ。行藥の路には草が荒れ、釣船の中には沙が泛んでゐる。（居易）長者の來訪も絕えて、榻を懸けて待つてゐるが、いつになつたら日を見られるだらう。又いつ倶に杯を擧げられるであらう。（起）井戸の側の桐の葉は既に落ち、檐の下の石も雨垂の爲に穴があかうとしてゐる。雨を吹き掃ふやうな風が吹けばよいが、雲霧を吹き掃ふ道がない。（禹錫）廩の米は古びて黴が生え、庖の薪は烟つて燃えない。雞は潛に曉を告げ、月日がドンドン立つて年も暮れる。（居易）高い松の枝からは雫がおり、柳の枝からは絲のやうに雨垂が垂れる。草葉を拂つては蝶や蟬を驚かす。（起）頭巾の角がだらりと下り、著物の裾は洗つたやうになり、人は合羽を著、馬は泥除を著けてゐる。（禹錫）好い客も來ないので、獨り悄然として濕つた泥に鶴が足迹をつけ、壁の雨漏が蝸の這つた迹のやうになつてゐるのを眺めてゐると、蚊が雷のやうな聲を立てて室に侵入し、鷗が翻つて川に浪を立てる。樓に上つては雲の覆へるを見、濺濺として軒を繞る水の音を聞いて愁へてゐる。（起）時節は正に秋で、久しく歡娛も絕えた。ただ高興があるならば、雨が晴れた後相攜へて遊樂するであらう。（禹錫）

喜晴聯句

晴を喜ぶ聯句

（一）苦雨晴何喜。喜多於雨時。

苦雨晴れて何ぞ喜ばしき、喜は雨時よりも多し。

氣收雲物變。聲樂鳥烏知。（居易）

氣收まりて雲物變じ、聲樂んで鳥烏知る。

（送上僕射。）蕙泛光風圃。蘭開皎月池。

蕙は泛ぶ光風の圃、蘭は開く皎月の池。

千峰分遠近。（二）九陌好追隨。（起）

千峰遠近に分れ、九陌好し追隨するに。

（送上尚書。）白日開天路。玄陰卷地維。

白日天路に開け、玄陰地維に卷く。

餘清在林薄。（三）新照入漣漪。（四）（禹錫）

餘清林薄に在り、新照漣漪に入る。

碧樹涼先落。(五)青蕪濕更滋。
曬毛經浴鶴。曳尾出泥龜。居易
舞去商(六)羊速。飛來野(七)馬遲。
柱邊無潤礎。臺上有遊絲。起
橋淨行(八)塵息。堤長禁(九)柳垂。
宮城開睥(一〇)睨。觀(一一)闕麗罘罳。禹錫
洛水澄清鎭。嵩(一二)烟展翠帷。
梁成虹乍見。市散蜃(一三)初移。居易
藉草風猶暖。攀條露已晞。
屋穿添碧瓦。牆缺召金(一四)鎚。起
迴徹來雙目。昏煩去四(一五)支。
霞(一六)文晚煥爛。星移夕參(一七)差。禹錫
爽助門庭肅。寒摧草木衰。
黃乾向陽菊。紅洗得霜梨。居易

碧樹涼しくして先づ落ち、青蕪濕ひて更に滋し。
毛を曬す浴を經たる鶴、尾を曳く泥を出づる龜。
舞ひ去つて商羊速かに、飛び來つて野馬遲し。
柱邊潤礎なく、臺上遊絲あり。
橋淨くして行塵息み、堤長くして禁柳垂る。
宮城睥睨を開き、觀闕罘罳に麗く。
洛水清鎭に澄み、嵩烟翠帷に展ぶ。
梁成つて虹乍ち見え、市散じて蜃初めて移る。
草を藉けば風猶ほ暖かに、條を攀づれば露已に晞く。
屋穿ちて碧瓦を添へ、牆缺けて金鎚を召す。
迴徹雙目に來り、昏煩四支を去る。
霞文晚に煥爛、星移りて夕に參差。
爽助けて門庭肅たり、寒摧きて草木衰ふ。
黃は乾く陽に向ふ菊、紅は洗ふ霜を得たる梨。

假(一八)蓋閒誰惜。彈絃燥更悲。
散蹄良馬穩。炙背野人宜。起
洞戶晨(一九)暉入。空庭宿霧披。
推林出書(二〇)目。傾笥上衣(二一)椸。禹錫
道路行非阻。軒(二二)車望可期。
無辭訪圭(二三)竇。且願見瓊(二四)枝。居易
山閣蓬(二五)萊客。古以祕書喩蓬萊。
儲(二六)宮羽翼師。此言少傅。
每優陪麗句。何暇覿英姿。起
翫景方搔(二七)首。懷人尙斂眉。
因吟仲(二八)文什。高興盡於斯。禹錫

蓋を假す閒に誰か惜まん、絃を彈ずれば燥更に悲し。
蹄を散じて良馬穩かに、背を炙る野人宜し。
洞戶晨暉入り、空庭宿霧披く。
林を推して書目を出し、笥を傾けて衣椸に上す。
道路、行、阻るに非ず、軒車、望期すべし。
圭竇を訪ふを辭する無かれ、且瓊枝を見んことを願ふ。
山閣蓬萊の客、
儲宮羽翼の師。
毎に麗句に陪するを優とす、何の暇ありてか英姿を覿ん。
景を翫んで方に首を搔き、人を懷ひて尙ほ眉を斂む。
因つて仲文の什を吟ぜば、高興斯に盡きん。

【字解】【一】苦雨　前の詩に見ゆ。【二】九陌　都城の大道凡て九條あるをいふ。【三】林薄　木の叢生を林といひ、草の叢生を薄といふ。【四】漣漪　さざなみ。【五】青蕪　青青とした野原。【六】商羊　鳥の名。雨ふらんとすれば鳴く。【七】野馬　かげろ

ふ。遊絲なり。【八】行塵　道のほこり。【九】禁柳　禁苑の柳。【一〇】睥睨　城上の短牆。【一一】觀闕　見晴臺なり。罘罳は衝立の如きもの。雍錄に、罘罳鏤レ木爲レ之、其中疏通、可二以透一レ明、或爲二方孔一、或爲二連鎖一云云とある。【一二】嵩烟　嵩山の烟。【一三】蜃　蜃市なり。蜃氣樓をいふ。【一四】金鎚　金槌。【一五】四支　四肢。手足なり。【一六】霞文　ゆふやけ。【一七】參差　散亂する貌。【一八】假レ蓋　宋史仁宗曹皇后傳に、張妃怙レ寵上僭、欲下假二后蓋一出遊上、帝使二自來請一、后與レ之無二靳色一とある。蓋は車蓋なり。【一九】晨暉　あさひ。【二〇】書目　南史張纘傳に、欲三遍觀二閣內書籍一、帝執二四部書目一曰、君讀レ此畢、可レ言二優仕一矣とある。【二一】衣櫳　衣架なり。【二二】軒車　大夫の車。【二三】圭竇　貧者の居る所をいふ。【二四】瓊枝　玉貌といふが如し。【二五】蓬萊客　祕書の官をいふ。樂天嘗て祕書監たり。【二六】儲宮羽翼師　太子少傅白樂天をいふ。【二七】搔レ首　詩經に愛而不レ見、搔レ首踟躕とある。【二八】仲文什　晉の殷仲文の詩。仲文の南州桓公九井作に、獨有二清秋日一、能使二高興盡一とある。

【題義】長雨の晴れたのを喜ぶ聯句である。

【詩意】長雨の晴れたのは旱に雨を得たよりも喜ばしい。雲霧がすつかり散じて、鳥の聲にも樂さが溢れてゐる。（居易が此四句を作つて王起に送つた）圃にも池にも蘭蕙が咲きにほひ、遠近の山峰がはつきりと見える。都大路を連立つて遊ぶにもよい。（王起が此四句を作つて劉禹錫に送つた。）天には白日が現れ、地には黑陰が收まり、餘輝が林叢を照し、池の漣まで照してゐる。（禹錫）樹の葉は涼風に遇うて落ち、野原の草は濕を得て茂つた。雨に浴した鶴は毛を曝し、泥を出た龜は尾を曳いて這うてゐる。（居易）商羊は既に飛び去つて遊絲がちらつき、柱礎のあたりが乾いて來た。（起）橋のあたりには塵埃も立たず、堤が長くて柳の枝が垂れ、宮城では物見臺を開いて見晴しをよくした。（禹錫）洛水は清らかに都城を繞つて流れ、翠帷を開けば嵩山の烟が見える。弓形をした虹のやうな橋も現れ、蜃氣樓のやうな建物もあちこちに出來た。（居易）草には尙ほ暖氣が殘つてゐるが、枝には既に露が晞いてゐる。碧瓦を添へて屋根の破れを繕ひ、金槌を取寄せて牆の破れを繕つた。（起）透徹した清澄味が雙の目にうつり、鬱陶しさが四體を去り、夕燒雲が華華しく星影が明滅してゐる。（禹錫）爽氣が門庭に滿ちて草木も生氣を失ひ、日に向ふ黃菊の花がひからび、霜に遇うた梨が雨に洗はれて紅を帶びてゐる。（居易）車を假り閒に任せて出遊するにも宜しく、管絃を弄すれば燥いてゐるので特に哀調が深い。馬の蹄も穩かに、野人の日向ぼつこをしてゐるのも野趣がある。（起）奧の方まで旭日がさし込み、庭の雲霧が披散したので、書物や著物を竝べて曝した。（禹錫）雨があがつて路もよくなつたから、願はくは車を驅つて訪ふ人もあれかしと思ふ。（居易）吾が友白樂天は祕書監たり太子少傅たる身分で、余は每に其麗句に陪するを光榮とする者であるが、願はくは其英姿を見たいものだ。（起）晴景を眺めて友を憶うた。朋友相會して殷仲文の詩を吟ずれば、高興が斯に盡きるであらう。（禹錫）

會昌春連宴卽事

會昌の春連りに宴す卽事

元年寒食日。上巳暮春天。（一）（二）

元年寒食の日、上巳暮春の天。

雞黍三家會。鶯花二節連。（三）（四）居易

雞黍三家の會、鶯花二節連る。

光風初澹蕩。美景漸暄妍。（五）（六）

光風初めて澹蕩、美景漸く暄妍。

簪(七)組蘭亭上。車輿曲(八)水邊。禹錫
松聲添二奏樂一。草色鋪(九)筵(一)。
雀(一〇)舫宜二閒泛一。螺(一一)杯任二漫傳一。起
園蔬香帶レ露。厨柳暗藏レ烟。
麗句輕二珠玉一。清談勝二管絃一。易
陌喧(一二)金距鬬。樹動綵(一三)繩懸。
姹(一四)女妝梳豔。遊童衣服鮮。禹錫
圃香知レ種レ蕙。池暖憶レ開レ蓮。
怪石雲疑レ觸。夭(一五)桃火欲レ然。起
正歡唯恐レ散。雖レ醉未レ思レ眠。
嘯傲人間世。追二隨地上仙一。易
燕來雙涎(一六)涎。鴈去累翩翩。
行樂眞吾事。尋(一八)芳獨我先。禹錫
滯(一九)周慙二太史一。太史公謂二滯周南一。今榮示レ慙二古人一矣。

洛に入りて先賢を継ぐ。
昔は恨む多く手を分ちしを、今は歡ぶ謬つて肩を比ぶるを。
病んで猶ほ讌飲に陪し、老いて更に周旋を奉ず。
望は重し青雲の客、情は深し白首の年。
徧く珍饌を嘗めて後、入るを許す畫堂の前。
舞袖紅炬を翻し、歌鬢寶蟬を插む。
斷金感激多く、倚玉遷延を貴ぶ。
史を說けば顏注を呑み、詩を論じては鄭箋を笑ふ。
松筠寒くして變せず、膠漆冷かにして彌堅し。
興は王の戴を尋ぬるに伴ひ、
榮は隗の燕に在るに同じ。
盧を擲つて氣を使ふを誇り、燭を刻して篇を成すを鬬はす。
實藝皆三捷、虛名六聯を媿づ。
興闌にして猶ほ白を擧げ、話靜にして毎に玄を思ふ。

更記歸時好。亭亭月正圓。(三八)起　更に記す歸る時好し、亭亭として月正に圓なりしを。

【字解】【一】寒食　冬日から百五日目をいふ。【二】上巳　三月三日の節句。暮春は三月。【三】雞黍　論語に殺レ雞爲レ黍而食レ之とある。三家は白樂天・王起・劉禹錫。【四】二節　二つの季節。【五】簪紱　貴人をいふ。蘭亭は晉の永和九年三月三日に、王羲之が四十餘人と相會して修禊の禮を行つた處。【六】曲水　晉書に、昔周公城二洛邑一、因二流水一以汎レ酒、故逸詩曰、羽觴隨レ波、又秦昭王以二三月一置二酒河曲一云云とある。【七】青雀舫　卽ち鷁首の船。【八】螺杯　青螺の殼で作つた杯。【九】鋪筵　敷いた席。【一〇】雀舫　【一一】園蔬　畠の野菜。【一二】金罍　金のけつめの雞。左傳に季邸之雞、【一三】綵繩　ぶらんこ。遊戲の具。【一四】姹女　少女なり。【一五】天桃　わかき桃の花。【一六】倚玉　世說に、魏明帝使レ毛曾與二夏侯太初一共坐、時人謂二蒹葭倚二玉樹一とある。【一七】顏注　唐の顏師古漢書に注すること莊だよし。世に顏注といふ。【一八】鄭箋　後漢の鄭玄毛詩に注す。毛詩鄭箋是れなり。【一九】松筠　松と竹。【二〇】膠漆　堅き交。【二一】王尋レ戴　晉の王徽之、字は子猷、月に乘じて戴逵を訪ひ、門に及んで返る。人其故を問ふ。曰く興に乘じて來り興盡きて返るのみと。【二二】隗在レ燕　郭隗燕の昭王に事へて寵遇を受けしこと。【二三】擲レ盧　骰子を投じて博すること。使レ氣は意氣を逞うすること。唐書に任俠使レ氣とある。【二四】刻レ燭　南史王僧孺傳に、竟陵王子良嘗夜集二學士一、刻レ燭爲レ詩、四韻者則刻一寸、以レ此爲レ率とある。【二五】三捷　三度及第すること。樂天の寄二裴令公一詩に、始擅文三捷、終兼武六韜とある。【二六】舉レ白　大杯を擧げる。【二七】亭亭　高き貌。

【題義】會昌　元年の春に連に宴した實狀を述べた聯句である。

【詩意】會昌　元年の寒食の時節から上巳の時節に亙り、吾等三人は雞を殺し黍を炊いで鶯花を賞する會を催した。(居易)　あたりの風光も春めいて來て、日增に暄美を加へた。因つて古の蘭亭曲水の會に倣つたのである。(禹錫)　松風の聲は奏樂の聲に和し、草の色は毛氈の綠を助け、鷁首の船を泛べたり、漫に螺杯を勸めたりした。(起)　畠の野菜は露を帶びて香しく、厨の柳は烟に包まれ、席上で作られた麗句は珠玉にまさり、清談は管絃にも勝つてゐた。(居易)　陌の喧しいのは雞の蹴合の爲で、樹の動くのはブランコの爲である。少女の妝はなまめかしく、兒童の衣服も華麗である。(禹錫)　圃の香しきは蕙草の植ゑてある爲であらう。池の水の暖かなことは蓮の花でも咲きはせぬかと疑はれる。庭石には雲が觸れるかと思はれ、桃の花は燃えるやうに赤い。(起)　正に歡んで散會するのを惜み、醉うてもまだ眠らうとしない。世人に嘯傲して地仙と相伍して樂んでゐる。(居易)　燕は來り鴈は去つた。吾等は行樂を事としてゐる。(禹錫)　吾は成周に留滯して而も光榮を得て、太史公司馬談に慙ぢ、劉白二君は洛陽に入つて二陸の後を繼いでゐる。嘗て離居を恨んでゐたが、今は謬つて肩を比べてゐるのを歡ぶ。(起)　病んでも猶ほ宴席に陪し、老いても尙ほ行遊を俱にする。君は天下の重望を荷ふ貴顯の人であるが、吾は白髮の今日まで親交を辱うしてゐる。(居易)　偏く珍味の饗應に預り、更に畫堂の中に迎へられた。舞妓の袖は火の如く、髮には金蟬の飾がつけてある。(禹錫)　斷金の交を結んで常に感激し、玉貌に接して離れ去るに忍びない。史を說けば顏師古にまさり、詩を論じては鄭玄を凌ぐ。(起)　吾吾は松竹の如き節操を持つてゐるから、膠漆の交は益〻堅い。興に乘じては王僕射に隨つて劉尙書を訪ひ、郭隗の燕に事へたやうな光榮に浴してゐる。(居易)

博戯をなし、時間を定めて詩を作る競爭をした。吾等は文官試驗に三回とも及第し、立派な爲政者としての虛名を得たことを媿ぢてゐる。(禹錫)　興闌になれば又酒を飲み、靜に玄理を語り合うた。今でも記憶してゐるが、歸る時には盆のやうな月が高高と昇つてゐた。(起)

僕射王起來示。有三春向晚四者難并之說一。誠哉是言。輒引起題。重爲聯句一。疲兵再戰。勍敵難降。下筆之時。曠然自哂。走呈僕射。兼簡尚書劉禹錫

僕射王起の來示に、三春晚に向ひ、四者幷せ難しの說有り、誠なるかな是言。輒ち引いて題を起し、重ねて聯句を爲す。疲兵再び戰ひ、勍敵降し難し。筆を下すの時曠然として自ら哂ひ、走つて僕射に呈し、兼ねて尚書劉禹に簡す

三春今向晚。四者昔難并。
借問低眉坐。何如攜手行。
舊遊多過隙。新宴且尋盟。
鸚鵡林須樂。麒麟閣未成。

三春今晚に向ふ。四者昔より幷せ難し。
借問す眉を低れて坐するは、何ぞ如かん手を攜へて行くに。
舊遊多く隙を過ぐ。新宴且盟を尋ねん。
鸚鵡林須らく樂むべし。麒麟閣未だ成らず。

分陰當愛惜。遲景好逢迎。
林野熏風起。樓臺穀雨晴。
牆低山半出。池廣水初平。
橋轉長虹曲。舟回小鷁輕。
殘花猶布繡。密竹自聞笙。
欲過芳菲節。難忘宴慰情。
月輪行似箭。時物始如傾。
見鴈隨兄去。聽鶯求友聲。
蕙長書帶展。菰嫩剪刀生。
坐密衣裳煖。堂虛絲管清。
峰巒侵碧落。草木近朱明。
與點非沂水。陪膺是洛城。
撥醅爭綠酎。臥酪侍朱櫻。

分陰當に愛惜すべし、遲景好し逢迎するに。
林野熏風起り、樓臺穀雨晴る。
牆低くして山半ば出で、池廣くして水初めて平かなり。
橋轉じて長虹曲り、舟回りて小鷁輕し。
殘花猶ほ繡を布き、密竹自ら笙を聞く。
芳菲の節を過ぎんと欲するも、宴慰の情を忘れ難し。
月輪行くこと箭に似たり、時物始めて傾くが如し。
鴈の兄に隨つて去るを見、鶯の友を求むる聲するを聽く。
蕙長じて書帶展べ、菰嫩かにして剪刀生ず。
坐することの密にして衣裳煖かに、堂虛しうして絲管清し。
峰巒碧落を侵し、草木朱明に近し。
點に與するも沂水に非ず、膺に陪するは是れ洛城。
醅を撥して綠酎を爭ひ、酪に臥して朱櫻に侍す。

幾處能留レ客。何人喚解レ醒。禹錫
舊儀尊二右相一。新命寵二春卿一。
有レ喜鵲頻語。無レ機鷗不レ驚。居易
青林思二小隱一。白雪仰二芳名一。
訪レ舊殊千里。登レ高賴二九城一。起
鄧侯司二管鑰一。疏傅儻二纓纓一。
綸綍曾同掌。烟霄卽上征。禹錫
册庭嘗接レ武。書殿忝連レ衡。
蘭室春彌馥。松心晚更貞。居易
琴招翠羽下。鈎掣紫鱗呈。
只願回二烏景一。誰能避二兕觥一。居易
方知醉兀兀。應是走營營。
鳳閣鸞臺路。從他年少爭。居易

更呈二公一。

幾處か能く客を留めん、何人か喚んで醒を解かん。
舊儀右相を尊び、新命春卿を寵す。
喜ありて鵲頻に語り、機なくして鷗驚かず。
青林小隱を思ひ、白雪芳名を仰ぐ。
舊を訪ふ殊に千里、高きに登り九城に賴る。
鄧侯管鑰を司り、疏傅簪纓に儻る。
綸綍曾て同じく掌り、烟霄卽ち上り征く。
册庭嘗て武を接し、書殿忝く衡を連ぬ。
蘭室春彌馥しく、松心晚に更に貞なり。
琴招いて翠羽下り、鈎掣いて紫鱗呈る。
只烏景を回さんことを願ふ、誰か能く兕觥を避けん。
方に知る醉うて兀兀、應に是れ走ること營營たるべし。
鳳閣鸞臺の路、從他年少の爭ふを。

【字解】【一】僕射　官名。王起を指して言ふ。【二】四者難レ幷　謝靈運の擬鄴中集詩序に、建安末余在二鄴宮一、朝遊夕讌、究二懽愉之極一、天下良辰美景賞心樂事、四者難レ幷とある。【三】勍敵　強敵なり。【四】瞿然　笑ふ貌。【五】尙書　劉禹錫を指して言ふ。【六】過レ隙　忽ち過ぎ去ること。【七】鸚鵡林　法苑珠林に、爾時世尊將二諸比丘一詣二鸚鵡林一、各敷二座於樹下一坐とある。【八】麒麟閣　漢の宣帝功臣十一人の像を麒麟閣に圖す。【九】分陰　僅の時間。【一〇】遲景　春の日。春は日が永く、暮るること遲ければなり。【一一】穀雨　季節の名。其頃にふる雨。【一二】芳菲　花草香美の貌。【一三】求レ友聲　詩經小雅伐木篇に、伐レ木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出レ自二幽谷一、遷二于喬木一、嚶其鳴矣、求二其友一聲とある。【一四】碧落　青天。【一五】朱明　爾雅に夏爲二朱明一とある。【一六】與レ點　論語に、曾晳曰、暮春者春服旣成、冠者五六人、童子六七人、浴二乎沂一、風二乎舞雩一、詠而歸、夫子喟然歎曰、吾與レ點也とある。點は曾晳の名。沂は沂水、魯の温泉なり。【一七】陪廁　廁は後漢の李膺。字は元禮、風裁峻整、太學中稱して天下模楷李元禮となす。士の接容を被る者、名づけて登龍門となす。ここでは樂天に比す。【一八】撥レ醅　濁酒の漉を開くこと。綠醅は美酒なり。【一九】朱櫻　赤いさくらんぼ。唐書李適傳に、凡天子饗會遊豫、唯宰相及學士得レ從、夏宴二浦萄園一賜二朱櫻一とある。【二〇】右相　天寶元年侍中を改めて左相となし、中書を右相となす。【二一】春卿　禮部の堂官をいふ。【二二】鵲頻語　禽經に靈鵲兆レ喜。注に鵲噪則喜生とある。【二三】鷗不レ驚　人機心なければ鷗鳥來り馴れて驚かず。事列子黄帝篇に見ゆ。【二四】小隱　王康琚の詩に、小隱隱二陵藪一、大隱隱二朝市一とある。【二五】白雪　すぐれた詩。宋玉の文に其爲二陽春白雪一、國中屬而和者、不レ過二數十人一とある。【二六】九城　九重の城。【二七】鄧侯　漢の薛何高祖を佐けて大功あり、鄧侯に封ぜらる。ここは王起に比す。管鑰は錠の鍵なり。【二八】疏傅　漢の太子少傅疏受。ここは白樂天に比す。簪纓は顯官。【二九】綸綍　禮記に、王言如レ絲、其出如レ綸、王言如レ綸、其出如レ綍といふ。詔書をいふ。【三〇】烟霄　高官に喩ふ。【三一】連レ衡　比肩といふが如し。【三二】蘭室　蘭省、【三三】册庭　書籍を掌る役所。武は足跡なり。【三四】松心　松柏の如き堅き心。【三五】翠羽　翡翠といふ鳥。【三六】烏景　日なり。【三七】兕觥　兕牛の角で作つた酒器。詩經に稱二彼兕觥一とある。【三八】鳳閣　中書省をいふ。鸞臺は門下省をいふ。【三九】營營　往來の貌。詩經に營營青蠅とある。【三九】

【題義】王僕射から手紙が來て、今や春も末になつて、終に良辰美景賞心樂事の四者を兼ねることが

出來ないとて歎聲をもらしてゐる。この言は誠に至當である。因つて此を發端として重ねて聯句を爲つた。疲れた兵で再び戰ふやうなもので仲仲勍敵を降すことが出來ず、筆を下す時に自ら一笑を發せざるを得ない。早速王僕射と劉尙書とに呈したといふ意。

【詩意】春も今や末になつて、良辰美景賞心樂事を幷せ得ることは難い。因つて君に問ふが、眉を低れてふさぎ込んでゐるよりは、相攜へて行遊する方がよくはあるまいか。(居易)　蹔遊は忽ち過ぎ去つてしまつた。新に盟約を結んで宴飮するがよい。麒麟閣上の名を期するよりは、鸚鵡林に遊樂する方がましである。(起)　光陰は人を待たないから、あだに過してはならない。春の好氣節に乘じ朋友相語らうて遊ぶがよい。今や林野には薰風が起り、樓臺には雨が晴れた。(禹錫)　牆の外には山が聳え、池の水も增した。虹のやうな橋を回つて鷁首の船が漂つてゐる。(居易)　殘の花が錦を綴り、密竹が笙聲を奏してゐる。春の好季は過ぎなんとしてゐるが、宴慰の情は忘れられない。(起)　月日は箭のやうに飛び、時節の物も盡きさうになり、目には鴈の兄弟が列を成して去るのを見、耳には鶯の友呼びかはす聲を聽く。(禹錫)　蕙草は書帶のやうに長く伸び、菰は剪刀のやうに生え出した。密坐すれば燠かさを覺え、堂上には管絃の聲がする。(居易)　山峰は青天を衝いて峙ち、草木は夏めいた妝を始めた。曾點ではないが時に溫泉に浴し、又李膺のやうな偉人に陪して洛陽に行樂する。(起)　甕を開き爭つて美酒を飮み、朱櫻を賜はる天子の宴に侍し、處かまはず醉を買はうではないか。(禹錫)　嘗て右相の尊位にのぼり、今春卿の寵命に浴した。鵲は頻に喜を報じ、鷗も驚かずに懷いて來る。(居易)　青林を見て

昔は千里を厭はず友を訪うたといふが、今吾が友は小隱を思ひ、佳詩を聞いては芳名を仰いでゐる。昔は千里を厭はず友を訪うたといふが、今吾が友は宮闕の高きに居る。(起)　王公は管鑰を司り、白公は簪纓に傲る。嘗ては兩公と同じく吾も詔書を掌り、宮廷に奉仕したものであつた。(禹錫)　吾も祕書を掌る役所に君と肩を比べて仕へ、蘭室の馥郁たる香を聞いたものであつたが、今も松柏の心益〻堅貞である。(居易)　琴を彈ずれば翡翠が飛び來り、鈎を下せば紫鱗が現れて來る。只日の暮れるのを惜むが、杯酒は敢て辭する所ではない。(居易)　只朋友相徵逐して眼前の醉を樂むがよい。年の少い者が官途を競爭しようと、そんなことはどうでもよい。(居易)

樂天是月長齋。鄙夫此時愁臥。里閭非遠。雲霧難披。因以寄懷。遂爲聯句。所期解悶。焉敢驚禪

樂天是月長齋し、鄙夫此時愁臥す。里閭遠きに非ざれども、雲霧披き難し。因つて以て懷を寄せ遂に聯句を爲す。期する所は悶を解くのみ、焉んぞ敢て禪を驚かさんや

五月長齋月。文心苦行心。　五月長齋の月、文心苦行の心。
蘭蔥不入戶。薝蔔自成林。　蘭蔥戶に入らず、薝蔔自ら林を成す。

雜體聯句　樂天是月長齋鄙夫此時愁臥里閭非遠雲霧難披

護(去)戒先辭酒。嫌喧亦撤琴。
塵埃賓位靜。香火道場(去)深。樂天
我靜馴狂象。餐餘施衆禽。
定知於佛佞。豈復向書淫。得夢
闌(七)藥凋紅豔。庭槐換綠陰。
風光徒滿目。雲霧未披襟。樂天
樹爲清涼倚。池因盥漱臨。
蘋芳遭燕拂。蓮坼待蠭尋。得夢
舍下環流水。窗中列遠岑(八)。
苔斑錢剝落。石怪玉嶔(九)岑。樂天
鵲頂迎秋禿。鶯喉入夏瘖。
綠楊垂嫩色(一〇)。綻棘露長鍼。得夢
散秩(一一)身猶幸。趨朝力不任。
官將方共拙。年與病交侵。樂天

徇(一二)樂非時選。忘(一三)機似陸沈。
鑒容稱(一四)四皓。捫(一五)腹有三壬(一六)。得夢
攜手慙連璧。同心許斷(一七)金。
紫芝雖繼(一八)唱。前後各在賓客。
白雪少知音。樂天
憶罷吳門守。相逢楚水潯。
舟中頻曲宴。夜後各加斟。得夢
濁酒銷殘漏(二〇)。絃聲間遠砧。
酡(二一)顏舞長袖。密坐接華簪。樂天
持論峰巒峻。戰文矛戟森。
笑言誠莫逆(二二)。造次必相箴。得夢
往事應如昨。餘歡迄至今。
迎君常倒屣(二四)。訪我輒攜衾。樂天
陰魄初離畢(二五)。將雨。

(二六)陽光正在參。五月之節。　陽光正に參に在り。

待公休一食。縱飲共狂吟。夢得　公休を待つて一食し、縱飲して狂吟を共にせん。

【字解】【一】長齋　長期の齋戒。杜甫の飲中八仙歌に、蘇晉長齋繡佛前とある。【二】鄙夫　劉禹錫自ら謂ふ。【三】蘭蔥　草の名。【四】薝蔔　花の名。【五】戒　戒律。【六】道場　修道の場所。僧院。【七】闌藥　禁籞をいふ。漢書に池藥未御幸者、假與貧民、注に以竹繩連爲禁藥とある。圍援なり。【八】遠岑　遠峰。【九】嶔岑　高く聳ゆる貌。【一〇】綖棘　絲筋の如きトゲ。長鍼は長き針。【一一】散秩　閒職なり。【一二】忘機　機巧の心なきこと。陸沈は莊子に方且與世違、而心不屑與之俱、是陸沈者也、注に人中隱者、譬之無水而沈也とある。【一三】四皓　秦の亂を避けて商山に隱れた四人の白髮の老人。【一四】三壬　管輅自ら謂へらく腹に三壬なきは不壽の驗となすと。三國志に見ゆ。【一五】斷金　易經に、二人同心、其利斷金とある。【一六】紫芝　古今樂錄に四皓隱居、高祖聘之、四皓仰天歎而作歌、有曰、曄曄紫芝、可以療飢、唐虞往矣、吾當安歸と。【一七】白雪　前の詩を見よ。知音は眞價を認むる人。【一八】吳門守　蘇州刺史。【一九】曲宴　小飲なり。【二〇】殘漏　夜のふけること。【二一】酡顏　醉うて赤き顏。【二二】莫逆　同心相契るをいふ。莊子に子桑戸・孟子反・子琴張三人相與友、直視而笑、莫逆於心とある。【二三】造次　わづかの時間。【二四】倒屣　客を迎ふるに急なること。三國志王粲傳に、蔡邕才學顯著、常賓客塡坐、聞粲在門、倒屣迎之とある。【二五】陰魄　月をいふ。畢は星の名。月の畢につくは雨のふる前兆である。【二六】陽光　日なり。參は星の名。

【題義】樂天は今月（五月なり）長齋し、予（劉禹錫）は愁臥して、居所相遠きにあらねども相會談して胸中の雲霧を披くに由なし。因つて感懷を寄せて聯句をなしぬ。ただ胸中の鬱悶を霽すを期して、樂天の禪定を驚かさんとするにはあらずとの意。

【詩意】君は五月に長齋し、平生の文心に加へて更に苦行の心を養ふので、蘭蔥の香をも近づけず、薝蔔の自然に茂るに任せておく。（夢得）　戒律を護つて先づ酒を廢し、喧噪を嫌つて琴を退け、賓席が靜に定まつた所で、僧院に香火の煙が漂ふ。（樂天）　我執の心が靜まれば狂象をも馴らすことが出來、餐餘の物を衆禽に施しなどする。專ら佛に佞することを務めて、讀書に耽るやうなことはない。（夢得）　藥闌の花は既に萎んで、庭槐の若葉が濃くなり、滿目の風光が我が心を慰めるが、胸中の雲霧は一向に披けない。（樂天）　樹に倚つて涼を取り、池に臨んで盥漱すれば、燕は芳蘋を拂つて飛び、蓮花は蜂の尋ね來るを待ち顏である。（夢得）　堂下には泉水が環流し、窗中には遠山が列つて見える。青い苔は錢を散したやうで、怪石は玉の聳えるやうである。（樂天）　鵲の頭が秋になつて禿げるやうに、鶯は夏になれば瘖になる。綠楊は嫩かな絲を垂れ、絲のやうな棘が鍼を露して來る。（夢得）　閒職にゐるのは結局身の幸である。朝廷に出勤するには體力が堪へないから。官情も世渡も共に拙で、齡と病とが身に逼つて來る。（樂天）　時を選ばずに樂を追ひ求め、機巧の心を忘れて世を避け、容貌を見れば四皓に似て居り、腹を撫でて見れば長壽の兆がある。（夢得）　君と相攜へて雙璧と稱せらるるを慙ぢ、心を同じうして斷金の交をなし、四皓に倣つて紫芝の曲を唱へても、世人は其眞價を認めない。（樂天）　憶へば蘇州刺史を罷め、楚水の潯で相逢うた時には、舟の中で頻に小宴を催し、夜中まで飲み續けたものであつた。（夢得）　濁酒を酌んで夜をふかし、絃を奏して砧聲を遮り、醉うて長袖を翳して舞ひ、美妓と膝を交へて密坐した。（樂天）　持論を主張して相讓らず、文を戰はして鋭鋒を振ひ、言笑して心に逆ふなく、事あれば相箴めたものであつた。（夢得）　往事を回顧すれば昨日のやうであるが、今も尙ほ

雜體聯句　樂天是月長齋鄙夫此時愁臥里閭非遠雲霧難披

餘歡を續けてゐる。我君を迎へる時は、常に屣を倒にして急ぎ迎へ、君我を訪ふ時は、必ず夜具を攜へて來る。（樂天）　近く雨が降りさうであり、時は正に五月である。天氣もよく熱くもならぬ中に、公休の日を待つて縱飮し、狂吟を共にしたいものだ。（夢得）

白樂天詩集終

續國譯漢文大成　文學部　第十二卷　〔非賣品〕

昭和五年八月三十日印刷
昭和五年八月三十一日發行
昭和五年八月二十九日再版發行

（岡山製本）

著作權所有

編輯兼發行者　國民文庫刊行會　東京市神田區小川町一番地
右代表者　鶴田久作　東京市本鄉區西片町十番地
印刷者　吉原良三　東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七番地
印刷所　康文社印刷所　東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七番地

發行所　電話神田（五三五）八三八番　振替東京一八五七二番　國民文庫刊行會

654
56

國立公文書館